KH378-J1
1200800074033

室生犀星著

創作

肉の記録

求光閣刊

創作

肉の記録

室生犀星著

文化社版

KH378-J1

國立國會圖書館藏書

I種

W

1200800074033

いにしへの眞間の手兒奈をかくばかり戀ひてしあらん眞間のてごなを

一

下總國葛飾郡眞間の里に、藪を負ひ、流れを隔てた一軒のみすぼらしい廢屋があつた。煤竹づくりの田舍窓には、何時も絲埃を避けるための手拭で髪をつつんだ、宮木といふ年若な女が、灯の沈むまで夜はおそく靜機の足場を踏み、それゆゑに漏れる織唄もなかつた。うすぼんやりした灯かげに映る女影は、筬引くごとに、搖れ艶めいて見えた。

たまに流れにかがんで、米を洗つてゐても、氣の沈んだ面窶れしてゐる手さきは、濡れるに增し

てほつそりと弱々しかつた。里人と挨拶を交してもそれきり言葉の數をつひやさない。裳をこぼれる白脛を見るばかりに、おのれ叢中に身を隱すやからは、いまもむかしも渝りはなかつたが、宮木は、それらにさへ取合はないでゐた。靜かさに沈み過ぎ、下げ髮の香も遠々しくあぶら香を褪せさせてはゐたが、寂落たる風徽には、一さうこまかにそよぎ濃ゆかつた。

宮木織臺を下り立ち、緣端で、日ざしの溫もるなかで、伸びすぎる爪を剪るため、足の甲をそらせ、鋏を加へながら、かへらぬ夫のことを考へ込んでゐた。心に憂ひのあるとき、近親に不吉の蟠まるときには、爪が伸びると云ふ、宮木はいくども溜息を漏らし、靜かに臘のやうな爪を剪りはじいてゐた。まだ若さを反れぬ足の甲は朽ちた緣板に鋭どかつた。

二

むかし此里に、眞間の手兒奈といふ、容子優しげな嫋女がゐた。麻衣に青衿を着け、低い木履と梳らぬ髮をうしろに垂れ、物思ひに沈みながら織臺の上に坐つてゐた。隣國の上召や、京洛の防人達の事寄せて戀ふのにも耳を借さず一人でくらしてゐたが、いつの間にか浦和の波に身を投げ果ててしまつた。淸らかな處女のこゝろとからだとを守り通したのだつた。が、手兒奈には容子うつくしい男があつたとも云ひ、なかつたとも稱ふ。

宮木は織り屑を指さきで撥き、手兒奈の、そのむかしに考へふけつた。自分もそれのやうな美しい哀れな身上でなければならなかつた。手兒奈の美しさが斑點になり、心の上にしるしして殘つたかれのことを考へると、おさ音も耳へはいらなかつた。美しいといふより、その哀れな淸らかさが慕はれてくるのである。

「おん身のやうにわたしも淸らかな暮しでありたい。」

三

宮木は出鄕二年になる夫が、發ちぎわに何處へも行つてはならぬ、此處で永くわたしを待てと言つたことを村人に話し、後添への口多きを斷つた。秋についで早や秋がめぐつて居た。

時は京家の下知に依つて、美濃の上野守、氏族の實胤とはかり攻め、御所方も拒ぎ戰ひ、世は矢叫びの眞中にあつた。宮木は、絹商人である夫、勝四郎が最早この世にないものと考へるより仕方がなかつた。實際に於て、それの計をつたへるものさへ、村人の中にゐた。

宮木はもはや炊ぐ米さへなかつた。いつの間にかほころびた麻の衣に、しかも青衿をつけた自分を織臺の上に見いだした。あたかも手兒奈の生れかはつてきたやうな貧しげな、その姿を宮木はさもしくはあつたが、心丈夫に眺めわたした。そして、むかし此里に眞間の手兒奈といふ女がゐたといふ、むかし語りを飽かず心の内で呟やき樂しんだ。

が、宮木はその空閨のなかで、夫勝四郎との、さまざまな思ひにせめられるときに、かならず手兒奈のことを考へ、自分もそれのやうに辛抱強くなければならぬことを、心に銘じた。

四

寛正二年の秋にも、なほ、世は騷亂の巷であつた。宮木は、古戸にうつり影ほそれる日夜の自分の姿を、その背もぼんやり眺め込んでゐた。何時の間にか、手兒奈のことを考へることが手頼りないやうな氣がした。實際さういふ女がゐたかどうかさへ、ときには疑はれたのである。それよりも夫との、飽かない考へにふけるのが、一さう宮木には沁々した氣持ちにならせた。

そのとき、ほとほと古戸を叩くものがあつた。萑が風搖れに戸を叩くのかと耳を澄したが、それにしては、柔らかい重さを含んだ音だつたので、すこし古戸の隙間明けをしてさし覗いて見た。ちやうど去年落雷して摧け裂かれ、まだ生々した樅の木かげに、ぼんやりした人影の佇んでゐるのが目にはいつた。宮木は瞳を据ゑた。仄明るみのなかに、まがふ方もない夫勝四郎は、わざと咳きをしながら立つてゐた。

落魄と垢面と、寂しげな微笑をふくんだ勝四郎が、そら明りのなかで、低い聲音で宮木を呼んだ。

宮木はすぐ走り出て、夫を席の上に招じ、そして叫んだ。

「おん身を待ち佗び、わたしは最早死にさうだつた。」

宮木は、火を明るく掻き立て、ただ、さめざめと笛のやうに啜り泣いた。あまりに突然な夫のおと

づれは、宮木の胸を掻き亂し、とりつくらふひまさへ與へなかつた。おさへるほど、垢面の夫がいぢらしく、目にみることが辛らかつた。默つた勝四郎も古席の上に、懷しげに跪坐を組み、宮木と膝を合し、その、瘠せを仄めかしてゐる脊をさすり〳〵話した。京洛の騷亂や、山賊に遭つたこと、そして故鄕のおん身はもはや此世にないものだと考へ込んだことなど……。

「そのやうにおん身に渝化りがなかつたならば、もつと早くわしは歸へる筈だつたのに。」

宮木は、宮木で、もう勝四郎が亡いものだと思つてゐたことを、それを傳へるものさへゐたことを話し出した。

五

二人は、戸を閉ざし、天窓の繩を引いた。そして勝四郎は、心くらやみ、ただ戀しげに火繩のやうになつてゐる妻をしづかに抱きしめた。宮木は、自分は手兒奈よりも手厚く幸せであることを、強い夫の抱擁の下で、こころ嬉しく感じた。

宮木は、ほんのりと葎漏るゝ古戸のかげで、ほのかな夫の肌の香をかいでゐた。夫の手は宮木の右の腕の上に、その腕はゆめではない正しい肱を持つてゐた。宮木は、嬉しく朝燒けのあかりを透し見、戸のすき間をうつしたとき、蓬の穗がするすうゐと搖れてゐた。起き上らうとした。が、勝四郎の姿はなかつた。右の腕に冷たい夜明けの風がそよぐだけだつた。

宮木は、もう一度戸の隙間をさし覗き、よもぎふの穗のゆれるのを眺めた。戸を開け、庭の方へ出て見たが、どの草も足敷きにされたやうなところもなかつた。

住居からやゝ離れ、庭竈の前で、藁茣蓙を敷いた村老が、朝餉の茶を煮てゐるのが、うす青い煙のなかに仄見えた。

六

宮木は、村老のもとへ行き、そして昨夜の話をした。村老はいつになく、たはやかに醉ふてゐるやうな宮木の艶姿に、顏しかめながら嗤ひ、とり合はうともしなかつた。宮木は、すぐ自分のしど

けない姿に氣がつき、帶を締め、もはや彼の老人にも會へぬ恥かしさを感じた。

宮木は。その夜おそくまで、耳をそば立て、草吹く風に胸をさわがした。あるやうで確かにそれとは分らない足音めいたものゝけに、幾度も溫かい床から、熱いからだをほつそりと古戸の方へすべらせた。そしては夫の肌の香につゝまれた。

が、そとは何のかはりもなかつた。宮木はさういふとき手兒奈のことを思ひ出した。手兒奈もかう亂れがちだらうとは思はれたが、自分では恥かしくてならなかつた。

七

それから六年の後、ある秋の日に、そのかみの老人のもとへ一人の男がたづねて來た。村老は茶を喫、やつれてゐるが、すぐその男が勝四郎であることを、變化りかけた俤の中に窺き見た。

「な勝四郎、むかし此の里に、さう、まだわしの親父の、また祖父の頃ぢや、眞間の手兒奈といふ娘がゐたさうだ。心ざし淸く、よそごとに耳を籍さずに身を投げて果てたさうぢや。」

村老は、苦茗を啜りながら勝四郎にも侑め、自分もあらたに、玉蟲色の茶碗をとり上げ言葉を繼いだ。

「それにも增しておんみの宮木は貞實であつた。いまは亡くなつてから最う二年にはなるが――。」

村老は、後山の、枯草の中にある、石ころを指さした。幾年も積みかさなつた枯草の中に、勝四郎は、やさしげな妻の顏をさし覗くやうな氣で、その石に手を觸れ、深い溜息をはいた。

八

「或る年の秋、お前がかへつてきたと言つて、朝早く取亂して、わしをたづねて來られたこともある。わしは微笑づて取り合はなかつた。」

村老は、眼に沈んでゐる古い記憶を呼び戻さうとしてゐるらしく、枯れた額に、手をしづかに當てた。

「あそこがお前の家だ。煤竹の、その窓口によく機を織つて居られた。唄もない、氣の滅入る音

は、わしのうちの柿の木によくひびいて來た。」

村老は、立つて勝三郎を、れいの藪を負ひ、流れを隔てた廢屋に伴つた。雨露と蜘蛛の巣と、奈須野紙の剝がれた佛壇と、古藁の上には、秋おそい蟲のこゑ〴〵が、二人の足音に礑とその聲をひそめた。

「の、勝四郎、むかしむかしこの里に、眞間の手兒奈といふ娘がゐた、それにも增してお前の宮木はしほらしい女だつた。」

村老は、同じことを繰り返した。勝四郎は、眞間の手兒奈といふ女は、どういふ女かしらなかつた。ただ、村老のいふところを解き味ふと、妻、宮木の、ひかへ目がちな、ほつそりした姿を目ににじませた。

九

勝四郎は、その夜、廢屋の古戸のかげに、村老から貰ひうけた燭火の下に、悄然と首垂れ坐つてゐた。かれの心は沈みよどんで、起き上らうともしなかつた。妻のみへないものの慕はしさが、じく〳〵沁みついてとれなかつた。

勝四郎は、蟲聲の起る、そして零餘子の蔓が這ふてゐる押入れや、納戸のすみずみや、蝗の死體のやうに毀はれかゝつてゐる機織臺のそばへ行き、宮木の手の觸れてゐさうなところ〴〵の、褪せた匂ひをかいで步いた。しうねん深いやうで、あるかないかさへ疑はれる女人の匂ひは、なほ思ひがけなくうつすりと、夢のやうにかすかに殘つてゐた。勝四郎は、わけても長い間、宮木が使つてゐたらしい茶碗を手にとりあげ、がちがちおのれの唇にあてた。冷たい陶土の味ひの遠くに、かれは、そのかみの宮木の肌をこがれた。

藪をゆする川尻の風は、蕭々と、襟もとを冷し、古戸のすきまから、漏れ、そよいで寂しかつた。

「宮木、わたしは戻つてきたがおん身はみえない。おん身はいま何處にゐるのだ。わたしはこのやうに零落れたが、も一度おん身にあひたい。」

勝四郎は、心内でかう呟やくと、亡きものを慕ふ心は、火の矢のやうに、むらがり、からだぢゅうを刺戟した。どこか、いつもいそいそしてゐた宮木の、その裾捌きさへ、古席の上にこぼれ、匂

ふやうな氣がした。夜になると、燭火のもとで縫物をしてゐた彼女のうなぢに、勝四郎は、ふいにその手をふれたことさへあつた。

「冷たい――。」

さう宮木は、白磁のやうな頸をちぢめ、はすかひに勝四郎を睨んだりした。はすかひに瞳をつかふときに、燭火のかげをやどしながら、きらりと光りをみせた。その瞳つきを勝四郎は好んでゐた。

「だからわたしは靜かにさうして見たのぢや。」

勝四郎は、すぐ宮木の前にぺたりと坐り、一心に縫ふてゐる宮木をぼんやり夜の更けるまで眺めこんでゐた。さういふ靜かな境致は氣の荒い、づるい絹商人の仲間からかへつたかれをなぐさめたいつまでかういふ平和な靜かさがあればよい、ふたりはさういふ寢ものがたりをした。ふたりは肌を合すときに、いつもこの世に不幸などといふものがある筈がないと考へてゐた。

十

勝四郎は、そのときぼんやり床柱の、上と下とから、白いうぢうぢしたものが絶え間なく降りたり登つたりしてゐるのを目に入れた。それは白蟻の、夜もなほ息づきながら天井裏へかけて蝕ひあらしてゐる列なりだつた。蓆を剝いでみると、床一面にその灰白な、うぢうぢしたものが列なり這ひ、そして限りなく動いてゐた。

勝四郎は身ぶるひを感じた。どこから、こんなに多くの這ふものが蝟集つてきたからいふことが、考へると恐ろしかつた。その二列にのぼつてゆく白いつらなりは、柔らかいチョオクでゐがいたやうに、ずるずる、天井の裏へまで圓光をしきつてゐた。が、ふしぎに勝四郎から二三尺はなれた、つまり行列にはぐれた一疋の白蟻が、あたりを同じい線をゐがいてぐるぐる廻り、いかにも寂しさうにみえた。きつと紛れたにちがひない――勝四郎はそれを抓んだ、柔らかい肌身はかれの親指と人差指との頭で、うようよ、蠢めきながら行列のなかに投げ入れられた。投げ入れられたときに、ちよいと狼狽へてみえたが、すぐ規律正しい群れのなかへ揉まれてゆき、だんだん柱の上へのぼつて行つた。

勝四郎は、いつまで茫乎としてそれを眺めてゐるうち、突烈烈しい喜びが何故となく不意にかれの胸を走り過ぎた。なぜか人間にはよく嬉しい氣分が理由もなくやつてきて、そのため何の爲めにかうも嬉しい氣がするのだらうと却つてそれを心でせんさくすることがあるやうに、勝四郎もいまその考へに心が領せられることを感じた。わくわくした鼓動のうちに或る柔らかい鳥の羽根のやうなものでからだを撫られるやうな氣もちでもあつた。

かれは眼を据ゑ、古戸の隙間を何氣なく見つめた。そのときかれはたしかに、白い卵なりの顔がすうつとあらはれ、それが優しげにほほゑんだことを、確かに、しかし極めてうつすりと、も一度考へなほすと、どこか夢のやうな氣でもあつた。しかしその顔はすぐ消えなかつた。そのまま凝乎とすはり、その微笑みの優柔を深めるだけだつた。勝四郎はまぢまぢその姿を凝視した。疑ひもない宮本の姿であつた。

十一

勝四郎は、立つて古戸を閉けた。蒼白い夜空の明りに浮いてみえる宮木は、なかば、蓬の亂れた間に立ち、その纖い手をだらりと垂れてゐた。

「宮木。」

さう勝四郎は、宮木の手を把つたとき、宮木はぐつたりと疲れたやうにそのからだを靠らせ。

「ええ。」

と言つたきり、さめざめと泣き出した。目を上げ、何かを話し出さうとしながら、口が思ふとほりに開けないためにか、その泣ぎごゑを歇めなかつた。勝四郎も、いまになつて何と言つていゝかわからず、その肩に手を置き、背をさすり〳〵ゐた。

「おれはおん身に會ひたさに、死にさうだつた。」

勝四郎のかういふ聲は、宮木には一度きいたことのあるやうな氣がした。いつか勝四郎のだつねてきたときにもかういふ言葉を聞いたことがあつた。

「おんみはいつかわしを訊ねてきて吳れた。おんみはそれを覺えてゐられるか。たしかにおんみだつた。」

宮木は、夫の顔をみ上げた。

「いや、おれはたつた今京洛からかへつてきたばかりだ。ふしぎなことがあるものだ。」

勝四郎は、はじめて宮木が、ゆめの中へ出てきた女だといふことを、ふいに、ありあり感じ出した。

「な、宮木、わたしだちは今ゆめをみてゐるらしいのだ。かうして居るのは、さうゆめの中にゐるのだ。」

宮木は、ほほゑんで、首づいてみせ、それに違ひないと言つた。

「わたしも先刻からさう考へてゐた。それに違ひないと考へてゐた。」

勝四郎は、その手を宮木に當て、これは意外にあたたかいと、さう感じた。

「夢なればこの手がこんなに温かいわけがない。」

宮木も、それに同意した。二人はしづかに抱き合ふた。古蓆の上に、またいつの間にか群を放れた白蟻が、ほつりと一疋、さびしさうに這ふてゐた。

十二

夜明けがたになると、勝四郎は、白蟻を指さし、宮木に眺めさせた。いまは天井一杯に這ふてゐた、

「あれは晝は出ない蟻だ。晩だけだ。」

宮木はそれに答へた。

「あの蟻がみんな姿を消してしまふと、おん身のそばにゐることができない。」

風が寒さをふくみ、嚔をしながら勝四郎は目をさました。いつの間にか宮木はそばにゐなかつた。

——そして白蟻もそのかげをおさめてゐた。

蓬のざわめきが夜明けがたの風とともに起つてゐた。

「やはり夢だつたか。」

勝四郎は。ふたたび古戸に身を寄せ、そと面をながめた、流れを隔てゝ住んでゐる村老は、朝起きとみえ、既に茶釜を焚きつけ、青い煙を立てゝゐた。

十三

此處はどういふ世界かしれなかつたが、大きな流れの河原になつてゐるところに、一人の女が坐り、かん／＼鐘をたゝきながら、その熱い脛を水に浸してゐる。宮木もその女にならひながら、どういふわけで燒けるのか分らない熱い足を、ながれの裾にひたした。水は冷たかつたが、赤銅のやうな色をしながら靜かにながれてゐた。

どこを見ても砂漠のやうに廣く、ただ、音といふものがなかつた。宮木は、何がために自分がこんなところへ來たのか分らなかつた。唯コワかつた。綠といふ色は、その一點をさへ着けてゐない、だゝつ廣い、山なみばかりの世界だつた。

「あなたは誰ぢや。」

その女は鐘鼓打つ手をとどめ、美しい眉をひらいて宮木をながめた。何といふ美しいことだらうと、宮木はうつとり見とれながらゐた。

が、そのとき思はず知らず、全くすべるやうな口調でこたへた。

「わたくしは眞間の手兒奈といふものでございます。」

さう答へると、思はずかほを赧らめた。なぜ自分でさういふ噓を吐いたのかと、すぐ後悔された。

女は、その美しい瞳で永い間宮木をみつめてゐたので、宮木は、しかたなしに、すぐ言ひ直した。

「いゝえ、わたくしは宮木といふもので、手兒奈ではございません。」

宮木は、また顏をあかくした。

「よく言ひなほしなさつた。眞間の手兒奈といふ女は……」

女は言ひかけて、そして自分の顏を指さして見せた。宮木はびつくりして、その手兒奈のそばにぺたりと坐つた。手兒奈は、宮木の髮をなでさすつて言ひきかせた。

十四

「わたくしは何時かあなたに逢へるだらうと思つて居りました。あなたこそわたくしと同じい心

持ちで、そしてわたくしの心に近づいて下すつた方でした。わたくしはあなたが川尻からはいて入らしつたときから、わたし自身をみるやうな氣で、迷つてゐらつしやるやうにお見受けしました。そしてきつと此方こそわたくしの名を言つてきてくれるに違ひないと、さう考へつづめてゐたのでございます。

「わたくしは自分の名前をいつの間にか忘れやうとさへしてゐたのでございます。こゝへ來てから何百年經つてからも、だれ一人わたくしの名前を言つてくれるものもなかつたのでございます。先刻あなたが眞間の手兒奈とおつしやつたときにも、わたくしは自分の耳をうたがふほど、も少しで自分の名前を忘れてしまふところだつたのです。それゆゑ、あの時あなたのお顏をぢつと眺めてゐたのです。そのうちふいと自分を思ひかへしたのでございます。」

「わたくしはかうして毎日あつい足をひやしながら坐つてゐたのです。いつかはわたくしの名前をたづねて來る人がないかと、それぱかりたよりにしてゐました。しかし誰一人わたくしをたづねてくれるものもありませんでした。」

十五

「わたくしはあなたの夫がかへつて居られることをちやんと存じて居ります。いいえ、おうたがひになつてはなりません。いつもあなたが居らした機織臺のそばに、れいの煤竹の窓のそばに、京洛からいまかへつて來られたばかりでございます。」

「あそこに、白い、なめらかな山のやうな、そして鐘のやうな研ぎすましたものが見えるでせう。あそこに、すぐわたくしの考へたことが、いつも靜かな影になつてあらはれるのでございます。あなたがいらつしやる前に、ものの二分も前に、あなたの夫のお姿がぼんやりあそこに映し出されたのです。そしてあなたをどんなに捜してゐらつしやるかわかりません。」

「あなたはすぐに入らしやるわけには參りません、やはりこゝで、足を冷してから、そして歩けるやうになつてからでないと、出掛けられないのでございます。この川の底は火のやうにどろどろしてゐますが、水は冷たいのです。わたくしのよいと言ふときまで、わたくしと一しよにこの鐘を叩いてゐなければなりません。そして再び彼の山の上に影のさすまで靜かにして居らつしや

らなければなりません。」

十六

宮木は、手兒奈に會つた嬉しさに、毎日、二人で鐘を叩いてゐた。そして山の上に影のさすのを待つてゐた。が、影はどこからどう來るのか、ちらとも動かなかつた。

「此處では？。」

手兒奈は、或る日、石の上に坐りながら話し出した。

「何か一つ思ひ殘したことだけは、きつと叶へられるのです。つまりあなたは夫に會ふために。」

宮木は、嬉しさに掻き上りたいやうな氣がした。

「えゝ、わたしはもふ一度會はねばなりません。」

手兒奈は、その翌日、宮木の肩をもち、砂の上に立たせた。

「さあけふはおいでなさい。」

宮木は、その聲のしたで、すぐ歩き出した。そのとき山の肌には、夫、勝四郎の姿がぼんやり浮んでゐた。宮木は、河原の道を急ぎ出した。ちいさい流れがあつた。そして何時どうして歩いてきたのか、藪を負ふた自分の家の前に立つてゐた。

十七

宮木は、夫と廢屋で會つて、又どん／＼歩き出すと、夫のこゑらしいのが、ふいに、うしろから聞えた。

「やはり夢だつたか？。」と。

宮木は、すぐうしろを向いてみたとき、わが家はもう視界を離れ、そのかたちさへ見えなかつたのである。

「いいえ、夢ではありません。いいえ、わたしはちやんとかうして居るんでございます。」

さう周章てゝ答へてみたが、ふたたび夫の聲はしなかつた。遠くの川霧のなかから、陰氣な、し

うねん深い、鐘鼓を叩くをとがかん〳〵立ちひびいて、宮木の胸を痛くした。宮木はもう一步も步く氣がしないで、考へながら立ち竦んだ。なんだか手兒奈のそばへ行きたくなかつた。

宮木は、それゆゑ今きた道をもどりかけ、一時も早く此處からのがれたい心になつてゐた。

「あなたはわたくしのところへ歸へらなければなりません。」

さういふ手兒奈のこゑが、靄の間から鋭どく、しかも意地惡げに、宮木のうしろから叫ばれた。

宮木は、みぶるひをした。と同時に、なぜ自分は手兒奈のことなぞ長い間考へたかと、それが後悔され、あのやうに美しい眉目にまた逢ふことがコワかつた。

が、手兒奈は、そのとき優しげに立ち寄り宮木を河原にみちびいた。宮木はもの言はずにゐた。

十八

手兒奈は、宮木を石の上に坐らせた。その瞬間から、宮木は、脛から下がしびれ、立ち歩くことができなかつた。

「既う影のあらはれる時もありません。そしてあなたは立つことができないのです。」

手兒奈の、その、美しい瞳のなかに妬ましげな色が動き、間もなく立ち消え、靜かになつた。

宮木は、濳然と啼いた。手兒奈といふ女が、怨めしかつた、と、その足は火のやうにいきれ立ち、水の冷たさを欲してやまなかつた。

宮木は、水のなかに脛を浸した。ながれは赤銅のやうに輝いてゐた。

蛾

一

お川師堀武三郎の留守宅では、ちやうど四十九日の法事の讀經も終つて、湯葉や精進刺身のさかなで、もう坊さんが歸つてから小一時間も經つてからのことであつた。表の潛り戸が軋むので、女房が立つて出て見ると、そこへ、いま法事をあげたばかりの武三郎が、くぐり戸から四十九日前に出たきりの川裝束で、ひよつこり這入つて來た。

心持のせいか髮も濡れ、顏も蒼ざめてゐた。おあいは、吃驚しすぎて、聲も出ないで凝然と見戍つてゐた。が、すぐに自分の夫であるかどうかさへ氣疑ひが起つていちどきは惡感をさへかんじた。

「いま歸つた。どうしたんだ。この線香の匂ひは――。」

堀は、すぐ玄關から匂つてくる青い線香の香をかいで、ふしぎさうに言つた。おあいはその聲音にやつと氣を鎭めることができた。

「お前さんが出ていらしつてから今日で四十九日も便りがないのだもの。ほんとに何處へ行つてゐたんです。」

おあいは、洗足するとき、夫の草鞋がすり切れて、足袋の裏まで砂利擦れがしてゐるのを見た。

「これには色々話がある。あとで話すとして――。」

堀は、座敷へあがると、佛壇の間の灯や精進料理の佛膳が、さびしい白飯の乾きを光らせて供へられてゐるのを見た。そこには、かれの法名と、四十五歳五月生れと、はつきりと新しい位牌さへ收められてあつた。

「うむ。」

堀は、吐息をついて、ぼんやりと何か頻りに考へ込んでゐた。

「ほんとに何處へいらつしつたんでございます。」

おあいは、夫が殆んど見ちがへるほど憔悴れ果てたのを、その頬や腰のあたりに見た。それより目がどんより陷ち込んで、ちからのない弛みを帶びてゐること、ものを正視するに餘りに弱くなつてゐることに感づいた。

堀は、手で話しかけてくれるなと言つて、非常に疲れきつて床の上にやすんだ。それきりかれはうとうとと眠り込んだかと思ふと突然起きあがつて、おあいの顏を凝乎とながめたり、ぼんやりした行燈をみつめたりした。そして氣がつくと。

「佛壇のあかしを消してもらひたい。」

さう言ひ出した。おあいは立つて、手扇ですぐ消してしまつた。あとは、を暗い行燈ばかりで、そとは、すぐ田圃つづきのかいかい云ふ蛙の聲が、いちどきに大方今夜も晴れてゐるらしい星空に向つて、遠くなつたり近くなつたりして起つてゐた。

おあいは、又しつこく訊ねたが、堀は、混み入つた數を算へるときのやうな空目をしながら考へ込んでゐたが、幾度も吐息をついて手をふつて見せた。

「おれ自身にもわからないんだ。たしか六月一日に出かけた覺えはあるが……。」

おあいは、その日裏の桐がはじめて花を拔き出したことを、門口で堀がさう言つたことを注意した。

「うん。それから――。」

かれは、いつもの場ン場の大桑村の淵へ出かけた。犀川の上流で、やや遅れぎみの若葉が淵の上を半分以上覆ひかぶさつて、しんと、若葉の風鳴りがすると、それにつれて、淵の蒼い水面に鱗がたのさざなみが立つて、きふに涼しさと寒さとが一どきに體温にかんじられた。ふしぎに淵の水面といふものは、流れがなくて、底へゆくほど流れが重りかかつてゐること、わけても大桑の淵にはそれが著しかつたこと、その日は鱒を料亭から受け合つて捕りに這入つたことなどを思ひ出した。

「ともかく大桑の淵へ潛つたことは實際だ。あそこは毎年鱒時にはひるので不思議なことはない筈だ。」

かれは、さう言ふうちにも。ごろりとした底ほど冷却つてゐる水肌を、いまもからだに感じた。岩と石とからなる淵は、表面からは傘をひろげたやうになつてゐて、ずつと岩石の底まで淵がつづいて、そこは、ながれの方からひとりでに射してくる明りが、ほんやりと見えるだけで、まるで暗かつた、岩から沁み出る清水の冷たさも加はつて、踵がいちばんさきに痺れるのが常であつた。そこへは、川師仲間でも誰も潛つてゆかなかつた。といふのは、潛りがきいても、流れへ出るまで大概のものは呼吸がつづかなかつたからである。

それゆゑ、堀は、ほとんど自分ばかりの場ン場にしておいた。鮎どき、石斑魚時、また鱒や鮭の季節も、そこを一と潛りすればよかつたほど、いつも捕れた。それは、それからさきの上流へ登るために鮎や鱒がしぜん溜るやうになつてゐるのである。

堀は、そこへ潛入つたことと、いつものやうに鱒を手網で三四本も拘ひ出したことを思ひ出したそして淵を出ようとしたとき、つかまつた岩がつるりと動き出したやうに思はれた。その岩は何時も淵穴を閉ぢてゐる大龜だつたことを思ひ出した。

「あれなら……。」

堀は、そこで龜のことを思ひ出して微笑んだ。おあいは、ぢつと堀を恐いもののやうに見つめてゐた。起きて何か考へるかと思ふときふに微笑ひ出したりするのが、くらい行燈のかげになつて無氣味だつた。

堀は、間もなく正體もなく眠りこんだ。おあいは、いつまでも、ふしぎな夫が、かうして何かの物語にでもあるやうに四十九日目にかへつてきたことを、きみ悪くかんじた。

〓おあいは、はじめてめて氣がついて、玄關へ出て行つた。そこには、網盥と、手網とその日の辨

當と、他に焚火の材料を切る鉈とがあつた。

辨當はつかつてあつた。手網も網盥もからからに干せあがつてゐた。ふしぎなことは、網盥のなかから町人内儀のつかふ塗櫛が一枚、網盥をうごかしたのでかつちりと音を立てた。おあいはかつとした。わけもなく、さう一時に頭がきうに重くなつた。こんな網盥のなかに女の櫛があらう筈がない。川漁に行つてこんな物が落ちてゐさうもないことだ。これは變だ。

「ひよつとすると――。」

おあいは、行燈のそばへ行つて、塗櫛をすかしてながめた。その櫛の背なかには、小さな魚族のむれが列をつくつてゐるのが、金蒔繪で、しかも巧緻に描きあげられてあつた。それから魚のつらなりは、ほそい、あるかないかの線状からなり立つて、ぴりぴり顫へてゐるやうだつた。櫛にしては珍らしい繪で、その上、おあいが鼻のさきへ持つて行つて齅がうとしたが、一向あぶらの臭ひがしなかつた。なんだか水苔のやうな、じめじめした匂ひが濕つて鼻孔を壓してきた。女のものなれば香料の匂ひがする筈だ。それだのに、一向それがしない。

おあいは、永い間、行燈のそばに坐つて一枚の櫛のうらと表とをすかして見てゐた。堀は、靜か

にねむつてゐた。蒼褪めた顔は小さく寂しげにやつれきつてゐたのである。

「おあい。」

そのとき夫は寢がへりを打つて不圖目をさますと、かう呼んだ。おあいは驚いてその櫛を膝と膝との間に入れた。

「まだ起きてゐたのか。」

「ええ。」

「いま何かおれが言ひはしなかつたかね。大きな聲で。」

「いいえ。」

おあいは。坐つたまま、背後へさう答へておいて、膝をもぢもぢさせた。見られはしなかつたかと氣になつたが、間もなく夫はすやすやと眠りはじめた。

櫛は、ほんのりと體溫であたためられて、それが却つて自分の體溫ではあつたが氣味がわるかつた。おあいは、うとうとした。遠蛙がやはり皓々と鳴いてゐた。

そのとき表のくぐり戸をしづかに叩くものがあつた。いまごろ來る客はなし、と、おあいは起き

あがらうとしなかつた。けれども、潜り戸がしきりに叩かれた。氣のせいではなく、どうやら訪ねてきたらしかつた。仕方なしに、おあいは手燭を點して、夫が目をさまさないやうに、そつと玄關から前庭へと出た。

「ただいまお開けいたします。」

おあいが恁ういふと、そとでは、靜かに言もしなかつた。が、やさしい女らしい聲で、透きとほるやうに言つた。

「夜中おさわがせいたしまして相すみません。じつは。」

潜り戸ががつちり開いた。おあいは、手燭で往來の方をてらした。そこには、町家の內儀らしい女中が白い顏をほんのりと浮かしながら佇んでゐた。

「寢入りばなだつたもので、つい、おまたせして濟みません。いまごろどちらから入しつて――。」

おあいは、內儀の顏があまりに鮮かで、美しく整ひすぎてゐるのに、ひやりと、心臟のあたりを一と撫でせられたやうで、小震ひをした。髮の地も、高い鼻がなまなましく細づくりで、それが、一番はじめに目にはひつた。

「ちよいと手燭をかして戴けないでせうか。大切なものを取落しましたので、」內儀は、さういふと足もとを捜しはじめた。

「それはお困りでせうに、お品物は何でございますかしら。」

おあいは、落し物なら夜中に起さなくともいいのにと、ふいに、內儀のうつむいてゐる腰のあたりを見ると、金繡のある立派な夏帶の上に、どこからきて止つたものであるか、一疋の仄白い毒々しい夜の蛾が、ぼんやり手燭にほやけて烱つてみえた。

「申しあげるやうなものでございませんの。たしか此の邊でしたが。」

內儀は、土塀つづきの小石垣の横合を、夜濕りのした地面の上から探してあるいた。古い城下の、椎や榎やタモの大木のある裏町には、星ぞらがともすれば蔽はれがちで、おけらがぶるぶると、溝汁の暗い片かげに啼いてゐた。

「たしかに此の邊でしたが、かうづうつと行きますと、ぱたりと落しましたので――。」

「お氣の毒な、もしや溝のなかにでも飛んだのではございませんか。」

「いいえ、たしかに地面の上でございましたよ。ぱたりと。」

內儀は、うつむきながら、だんだん、溝づたひに、こんどは堀のくぐり戸のそばまで來たが……

足を停めた。

「ふしぎなことがございますのね。たしかに落したものが見えないつて――。」

おあいは、すこし寒氣がした。內儀も搜しつかれて、

「では明日晝のうちにでも、小僧に見に來させますからどうかお休みになつて――どうも夜中おさわがせして濟みません。」

「いいえ。わたくしの方でも氣をつけて見てお置きませう。」

おあいは、さう言つて潛り戸の方へ寄たが、內儀は低い聲で、

「もう幾つでせうか。」

「九つをもう廻つたでございませう。ではお休みなさいまし。」

內儀は、暗い裏町を步いて行つたが、氣になつておあいは潛り戸から顏を半分出して、暗いなかにもつと暗みある影を眺めてゐた。いつたい何を落したのか、それも云はないで夜中に變な人だと聞耳をすますと、もう小路を曲つて行つたのか、足音もしなくなつてゐた。

玄關の引戸を引かうとすると、白い蛾が、さつきの蛾かも知れないやつが、ぱたぱた、手燭の方形に吐き出したあかりをぐるぐる廻つた。

「しつ。」こんどは、頸首にきた。

しかたなしに手燭を吹き消した。もとの行燈のところへくると、はじめて、はつと氣がついて帶の間に手をいれてみると、さつきの櫛が失はれずにあつた。その瞬間におあいは思ひあたつて吃驚りした。それと一しよに、塞さと震へが齒と膝がしらへしがみついた。

「しかしそれは氣のせいにちがひがない。まさかあの內儀ではあるまい。」

おあいは、細帶一つになつて、燈心をほそめ、櫛は、行燈臺の小抽斗しにいれだ。そして床にはひつたが……そのとき、ふいに目をさました。

枕もとには、れいの行燈がぼんやり點れたきりで、堀も、深寢をしてゐるらしく鼾さへかかなかつた。惶てて行燈の小抽斗を開てみると、寢る前に入たとほりに櫛がしまはれてあつた。

二

堀は、やつと床から起られるやうになつてからも、一日ぼんやりとしてゐた。川へは一切漁に出かけることもなく、鬱々として何を云つても確かに返事さへもしなかつた。ふしぎな四十九日間の外出が、おあいには少しも分らなかつた。

ただ、閑暇さへあれば、堀は、家ぢゆうを捜して歩くか、庭へ出て樹の根もとにしやがんで、茫然と空を眺めてゐるかして、埒もなくぼんやりしてゐた。漢醫にきくと、何か憑きものがしてゐるとだけで、細かい病狀が分らなかつた。

不思議なことは、そのころお城下はもちろんのこと近在に至るまで、夜になると、野犬の群がうすぼんやりした月夜のけむつたなかに、びようびようと吠えたけつてゐた。さういふ晩になると堀は、きつと庭さきへ出て、永い間蹲んでゐるかと思ふと、兩手を地に突いて、やはり野犬のやうな吠え聲を出した。それは決つて月夜で煙つた晩で、きまつて堀は誘はれるやうに夜啼きをするのだつた。おあいも、初めのうちは氣味惡く思つたが、慣れると、しかたなく裏戸を開けて、淺間しい

夫のさういふ姿を青い庭木の間にながめた。堀はただ、さういふ一時間ばかりの發作が濟むと、夜露でぬれた髪をしたまま、もとの居間へかへつた。ぐつたり疲れて、永い睡眠がいつも決つて發作のあとからしてくるのが常であつた。

おあいは、堀がたえ間なく櫛を捜してゐることを勘づいてゐたが、なるべく目にふれないやうにしておいた。れいの内儀も、あの晩きり尋ねてこなかつた。おあいは、このふしぎな櫛を簞笥のなかに收つて、再度と取り出して見ようとしなかつた。

或る靜かな、まだひどく暑くならない午前のことだつた。おあいが、ふと庭に出てみると、堀が何時ものやうに杏の根もとにゐたが、ふしぎに垣外に一人の女が立つて、杉の新芽立ちの間から庭中を窺つてゐるやうだつた。よく透してみると、背中に汗のするほど驚いたのである。それは、いつかの晩の内儀でやはり町人づくらの派手な塗下駄で、日傘を指してゐた。

堀は、ふと目を垣そとに遣つたが、これも不思議さうに、木のあひ間から透しながら歩いて行つた。顏だけを差し出した妙な寂れた堀の姿は、激しい初夏の光のなかに靜かすぎるほど濃い影を地にひいてゐた。

「ちよいとお尋ねいたしますが、そのちよいとばかり――。」
その聲は、きき覺えがあつただけ、おあいはぎくりとした。やはり、いつ日の晩の女にちがひないと、さう考へると、そつと庭木の間にからだを匿した。
堀は、ぼんやりと盲人のやうな歩き方をして、耳をかたむけたが、何も返事をしなかつた。
「お尋ねいたしたいのでございますが。」
又さういふ透き徹つた聲がした。堀はそのとき既に垣一重隔て立つてゐた。
「ご用向きは――。」
堀の顏は、ふしぎさうに、例の、生々しく美しい鼻を眺めた。
「先日から少し落しものを致したので尋ねてゐるんでございますが、そのかいもなく判りません。」
「はあ、落し物をな。」
堀は、考へ込んで、それきり立つて動かなかつた。
「もしお宅のお庭にでもないものかと存じまして――。」

内儀は、垣のそとから微笑んでみせた。それが堀には何處かで見たことのある微笑みのやうに思はれたが、どうも覺えが出ない。手を拱んで考へてゐるうち、内儀の日傘の上に日かげが移つてゐた。
おあいは、そのとき直ぐに垣のそばへ寄ると、内儀はていねいにあいさつをした。そして、
「先夜はおそくまでおさわがせして相すみません。」
さういふと、又靜かに微笑つてみせた。おあいは、この不思議な内儀と、堀の病氣とが係はつてゐるやうに思はれてならなかつた。
「お話ですと家の庭にでも落してないかと仰有いますが、さういふものは一向に見當らないんでございますよ。」
おあいは、堀に家へはひつて休むやうに言つたが、やはり動かないでゐた。
「何か御病氣にでも……。」
内儀は、堀の顏をみて、おあいにさうたづねた。
「えゝ、すこし氣鬱病でございまして捗々しく參りません。」
「それはお氣の毒な。」

内儀は、さういふと、一と足さがつて歩き出して行つた。堀は、裏門からこつそり出て、杉葉垣のしづかな裏町を、ほどよい朝しめりのした道路に水々しい影をおとしてゆく内儀の姿を見送つてゐた。おあいも、そこに立つてゐた。が、内儀はいちども振りかへつて見ないで、もう町かどを曲つた。と、堀は、さつきから張り詰めてゐた氣のせいで、ぐつたりと發熱の勞れを感じた。

三

ふしぎな朝がほとんど毎日つづいた。堀は朝になると裏門の庭常の茂りのかげに蹈まつて、柔しい足音を待つてゐた。その時刻には黑い日傘をさした内儀が、ときには淺草草履を引つかけて、しんと、音もない裏町をやつてくるのである。何處からくるのか、その時刻になると氣のせいか若葉まで靜まつて、長い裏町に子供のかげすらないほど閑寂としてゐた。

堀は、生垣の裾漏れから裏町を窺つてゐて、内儀がちかづくと、しづかに立ちあがるのが常であつた。

「すこしお尋ねいたしますが。」

内儀は、きまつてかういふと微笑んで見せた。堀も、まるでその言葉を相圖に微笑みをかへすのである。堀は、さういふ一日づゝが經つてゆくごとに内儀の顏がずつとさきから心の中に生きてゐたことを朦朧として意識のなかにも感じた。どこかであつたことがあると思つても、その意識はすぐさま錯然として混亂した。

「おあいさんは今日はおいでぢやありませんか。」

「おあいは勝手でせう。」

堀は、さういつものやうに答へると、女はしづかな聲を立てゝ微笑ふ。堀は、内儀の、白味がちな目をみつめてゐると、しんとした氣になつて、からだを羽毛か何かで撫でられてゐるやうな恍然した氣もちになつて了ふのだつた。内儀は内儀で、その目の光を艶やかにそつと微笑ませながら、そつと惹きよせるやうに、堀の目のなかに、目に見えない温かいものを一杯に注ぐやうだつた。堀は、うつとりして、その美しい目をからだ一杯に浴びてゐた。

「落し物は——。」堀は、いふことがないと、かう尋ねてみたが、内儀は、そのたびに寂しくわら

つて見せた。

「なかなか見つかりはしません。」

内儀は、纎い美しい手を垣根の青い茂みに與へてゐるのが、堀には、あまり白く鮮明で、鋭どくなつてみえた。が、その上に自分の手を置くことができなかつた。

さういふときは決つて、おあいが勝手から出て來た。そしてすぐ、堀を庭から家へ入れようとした。そして内儀も歸すやうにした。

「何か御用で……。」おあいは、堀と内儀との間に、立ちはだかつてかう云ふと、内儀は、ちよいと赧くなつてもぢもぢした

「いいえ、何も。」

「それならずつとおかへり下さいまし。夫は氣鬱病ですし、あまり永く庭へ出てゐるとよくないものでございますから。」

おあいは、さう厳しくいふと、内儀は、詮方なささうにすうと垣根をはなれた、堀は、おあいの姿をみてから小さくなつてゐたが、それでも、内儀のあとを見送つてゐた。

「厭な女もあればあるものだ 毎朝のやうにやつてくる。いつたい何の用事があるのだらう。」

おあいは、獨り言をして、堀を家のなかへ入れようとした。が、堀は、頑固に蹲んでぢつとしてゐた。

「おれはまだ此處にゐるのだ。」

おあいは、日光が蒸しついてくるので、頭によくないと言つて。

「居間で一と眠なさい。だいぶ疲てゐらしつやるやうだから。」

と、肩に手をかけようとすると、いきなり手を拂ひのけた。

「此處の用事があるのだ。」

「どんな用事があるのでございます。」

堀は、それには答へないで、れいの、しきりに手をさしのべて、指折りかぞへてゐた。何をかぞるへのか、かれは、ひまさへあれば蒼白い指さきを折つて、口のうちで、ぶつぶつ言ひながら日暦を繰るやうにしてゐた。おあいは、それが五本づつ九度折つて、あと四本だけを折るのを毎日のやうに眺めた。やはりあの四十九日間に何事が起つたに異ひなひと思つても、やはり解らなかつた。たしかに

彼の女がかかはつてゐるのだ。それだけの見當で、それ以上おあいにも堀にもわからなかつた。

おあいは、さういふときに、れいの櫛のことを話した。櫛を拾つたことがあるかとたづねても、やはり頭を振つてゐた。

「櫛。ふむ。」堀は、口へ出して言つて考へ込んだが、表情はべつに亂れもしなかつた。おあいには、しまひには何が何だか分らなくなつてゐた。

夜になると、堀は庭へ吠える眞似をしてたが晝のうちはあまり發作がなかつた。ただ毎朝のやうに、れいの、内儀がやつて來た。そのたびに堀は裏門を出てゆくことがあつた。或る日、それも朝のうちだつたが。やはり庭にゐる筈が突然ゐなくなつた。いつもくる内儀がもう何時の間にか來て行つてしまつたあとなのか、姿も見せなかつた。

おあいは、裏町から通りまで探したが、一向堀らしい姿が見えなかつた。が、次の日になつても堀はかへつてこなかつた。

おあいは、晝となく晩となく、河べりをさがしてあるいたが、どこにも堀らしいものがゐなかつた。そのときおあいは何心なく不意に例の櫛のことを思ひ出した。そして簞笥をしらべるといつ

間にか櫛は失はれて了つてゐた。

おあいは、犀河べりの大桑の淵へ行つて、そこで堀が漁をしにでかけてから不思議があつたのでともかく、淵へ出かけることにした。

大桑の淵は、どす黑いまでの濃霧が覆ひかぶさつて、一すぢの水さへ動かなたつた。しんとした水の上に、すうゐすうゐと走る水馬か、水流を曳いて辷つてゐるだけだつた。

おあいは、そのとき不意に卯の花がこんもりと腐れてゐるかげに、れいの内儀のさした日傘が、すぼめたまま投げ出されてあつた。おあいがそれを手にとると、何も彼も分つたやうな氣がした。堀の物らした遺留品とては一つも見當らなかつた。

おあいは、ぐつたり疲れて草の上に坐つてゐるうち、ふしぎに水中にちらつく或る影を見つけた。それは堀にも似てゐたし、さうでない他の人物のやうにも思へた。が、女の方は、どうも毎朝やつてきた内儀に異ひなかつた。

彼女は、あまりの妬ましさと腹立たしさとから、手ものにあつた石を投げ込んだ。破紋が立つてそれが微笑つてゐるやうに見えた。又一つ投げた。すると又微笑たが水面にうかんで見えた。彼女

は同じことを繰りかへしてやつてゐるうち、蒼然とした淵全體がだんだん廣がつてゆくやうになつて、それが次第に胸もとを壓してくるばかりでなく、ともすると、からだが前のめりになつて仕方がなかつた。反對にちからを入れれば入れる程、もんどり打つて陷ち込むやうな氣がしてくるのだつた。

彼女はしまひには殆眩惑ひさへかんじてきた。嘔氣と目まひと前のめりとが、交る交る迫つてきた。淵がだんだん目の前にせり上つてくるのだつた。しまひに彼女は水面の冷たさを五體にありありと感じた。

心臟

よくある型の、それは單に老青年にすぎない程非常に靜かで物腰がていねいである。日に燥けた顏の底の方にあるやうな、どろんとした鈍い目をしてゐる。强ひていへば猾さうにみえるが、それよりも却つて慴えて怯怯してゐると言つた方が適當かもしれない。とにかく、それは梯子段の裏のうす暗い部屋に住んでゐた。晩方、きまつて一合ぐらゐの飲酒をするものと見え、古い支那の詩吟はいつも時刻をちがへずにうたつてゐた。餘韻のある、嗄れてゐて絲のやうにほそぼそしい聲であつた。柱にでも靠れてうたつてゐるらしく、さうして、その黝ずんだ格構は充分目に描くことができた。なぜかといへば、なりの倭い男が寂然とあぐらを搔き、手を膝の上に置きながら、からの杯を前にして、すこしばかりの醉を吹いてゐる姿があまりにありふれてゐるからである。

だが、わたしはその一定の時刻には、まい晩となく古い詩吟をきいてゐるため、いつの間にか夕刻にはそれが起らないと、氣になつてならないのである。それの起らないときは外室してゐると見える。大概さういふことはないが、一と月に二三度ぐらい詩吟の絕える晩があつた。わたしの部屋は梯子段の上にあるし、窓は近くの長屋のトタン屋根を見下ろせる位置になつてゐる。老青年の窓も同じい方向であるため、容易に窓さへすこし開いて居ればきこえるのである。トタン屋根に佗し

い雨のふる晩なぞ、線々として詩吟がつゞくのである。

わたしはまだ一度も話をしたこともないし、また、部屋のなかを覗き見たこともない。ただ、かれがよく午後四時ころに、何處からかへつてくるのか、きまつて古い表門の戸を開ける音をきいた時間がふしぎに一定してゐたからわたしの注意を惹いたのかも知れない。春の終りころの埃で裾廻りを白く染め、それを廊下から內庭へ向つて、きまつて歸るとぱたぱた叩いてゐた。わたしはそれの夥しい埃が、すこしばかり辷り込んだ中庭の日ざしに煙るのをよく想像してみてゐた。

このふしぎな老青年と、あとさき三度ばかり町中で出くはした。いちどは一品洋食室の土間で、一度は本鄕の支那本を賣る樂古堂の店さきで——さうして、その洋食屋では、なんでも僅かに藍色の輪廓を取つた皿が一枚だけ、かれの坐つた椅子の上に取り殘され、白銅が二枚そこにころがつてゐるのを見ただけである。なぜといふに、わたしの這入つたときは渠のもはや去らうとしたときであるからである。わたしたちは目禮をしただけで別れた。おたがひ貧しいものが左ういふ身すぼらしいところで落ち合つたときにする、いくらか卑屈な寒いやうな些として驚きの目を交しただけである。

二度目でこの老青年——（わたしは屢々老青年といふ言葉をくりかへしてゐるが、ちよつと一見すると四十五六位に見えるのである。青年ではないかもしれない。）と會つたのは、切通しの坂へかからうとしたところにある。唐本屋の店さきだつた。わたしは第いちに、うしろ向きになつてゐる渠の羽織に見覺えがあつたからである。渠は七八册の唐本を風呂敷包みから取り出し、本屋の主人の手にわたさうとする、白い火鉢の上の、かれの手つきを見ただけで、わたしは急いで通りすぎたのであつた。さういふ事を見てゐることも恥かしいことであり、見てはならないものであるやうに考へたからであつた。本をわたさうとする渠の及び腰と、本屋のあるじの應揚な手つきでそれを受けとらうとする、それらの對照が、妙に白いつるつるした肌のうつくしい火鉢とともに、しばらくわたしの眼底を去らずにゐたのである。

晩春で、そとの空氣がすぐ眼を疲れさせてしまふころである。わたしは輕蔑できない或る氣持ちに縛られ、寂しいきれぎれな感想をあたまにうかべ、こころもとなく歩いてゐたのである。わたしと渠とに關係はない。ただわたしは二階に住み。渠は階下に住んでゐるたけである。强ひていへば同じ屋臺骨のしたに住んでゐるといふ因緣はあり得るが、それ以上何んでもないのである。それにも拘はらずわたしは氣鬱して寂しくて叶はなかつた。三丁目から甃石の上を行きながら、第一に考

へたことは渠の年齢のことであつた。四十五六としてみても、わたしより二十年さきに生れたんだ當然わたしよりさきに死ななければならないんであつた。わたしどものやうな生若いものにとつてたんに渠を憐愍するといふ感情ではなく、それ自身がもはやわたしには朽木を眺める氣をおこさせた。かれは必らず一人者でなければならぬまで、さうして何者の親づきのないもののやうに、わたしには考へられたのである。

渠の仕事といふものが、わたしにはとんと分らなかつた。あるひは寫字のやうなものが一番近い想像かと思はれた。何處へつとめるといふことがない。いつも小さい包みを手に持つて午後になると出かけるのである。それから三度目に會つたときは、うす暗い雨でぬかつた本郷の裏町で、低い日和下駄をはいたまま、潦を拾ひながら歩いてゐた。何の用事だかもよく分らない。唯通りすがりに渠とわたしとは同宿である因縁から、れいの目禮を交はしただけだつた。そのときも、やはり紙包みを持ち、その手は霙にちかいうそ寒い頃たつたので、あからんでゐた。

わたしたちは、つまり渠とわたしとは、春から冬まで一年を送つてしまつた。會つても話をすることもなく、お互ひに目にふれないやうに心がけ、おたがひのうしろ姿だけをお互に見送るにすぎなかつた。本綿の羽織は秋遲いころから、再び春時のやうに着られてゐた。わたしはその羽織の縞と、暗い色とに倦いてしまつてゐた。

と言つても、この老青年ばかりではない、わたしのつぎの部屋に準牧師が一人ゐたし、その次には學生もゐた。階下に老青年の外に保險屋夫婦がゐたりした。かれらは一やうに晝間はゐなかつたわたしと渠とだけが晝間殘つてゐたのである。

準牧師は卅以上にみえた。かれも老青年のやうに靜かで勿體振つて、ときどき、あるひはお祈りするかと思はれる聲で、何かしら一人喋りをしてゐた。さうかと思ふとそれは演說のやうにもきこえた。それほと牧師は獨言ばかりを言つてゐたのである。たとへば階段を上りつめると、わたしの戶の前で、きまつて獨り言をした。最も階段といふものは、それを上りつめるときには、かるい無意識の快感をかんじるものである。それゆゑ、よく輕口をつきたくなるものである。かれもそれの感じにとらはれてゐるのかも知れない。ただ、かれの獨り言はさういふ場合に限られてゐないのである。

みんなが寢靜つたころにも、突然かれの聲がきこえるのである。――わたしは、かれの獨り言に

よつて、わたしがさきにゐた宿で、三十年間同じ宿で同じ食事をしてゐた東京地方裁判所の寫字室へ通つてゐる四十七歳の、廣島の生れの男を思ひ出した。じつさい彼れほど獨り言をいふ男をわたしはこれまでみたことがなかつた。彼れは部屋には長火鉢や鐵瓶や茶器や目覺時計や古いながらも箪笥まで持つてゐた。かれの部屋の前へ通ると、鳴りの這入つた鐵瓶のたぎる音や明るい時計のきざむのや、ときどき箪笥の軋む音なぞが起り、宿屋には珍らしい落ちついた暮しをしてゐた。かれがそこに三十年ゐる間に、下宿の經營者が六人かはつてゐた。が、彼れだけは何時も最後の一人のやうに居殘り、居殘るたびに前經營者同樣の賄料を拂つてゐて、經營者は、それ以上をかれから要求できなかつたほど、かれ自身が一種のさびのある下宿人のやうに思はれてゐた。

彼れは朝でかけ、晩おそくかへると、決つたやうにただいまといふ言葉を、あたかも室内に居る人に對つてするやうに言ひ、それからぶつぶつ長火鉢の前に坐ると、れいの獨り言を初めるのである。それはわたしどもの部屋からきいてゐると、まるで低い聲で女とでも話してゐるやうに、ときをり間を置き、考へてゐるやうに喋るのである。めんめんとして盡きないのである。いつごろから彼れがさういふ獨り言をしやべるやうになつたかは分らないが、宿のさきの經營者もやはりそれを知つてゐたさうである。さきの經營者は五年間やつてゐたので、それから押して考へると餘程古いことにちがひない「なぜかと云へば、そのときの經營者は、代をかへてから三年經つてゐたから、つづまり八年間は明らかに彼れが獨り言をしてゐたといふことが、證明できるわけである。

曾てかれのところに客をみたことがない。また賄料をためるやうなことも曾てなかつたごとく、一夜として外泊をしたことがなかつた。ただ、かれは身なりをととのへ、電車に乘り寫字室へゆくのが樂しみのやうに見えたさうである。實際、いまどきの人間になほさういふ人があらうとはちよつと思へない。かれは町をあるくときもやはり絕えず沸々口のうちで何かをつぶやいてゐたさうである。

わたしは、彼の顏貌を半年ばかり、殆毎日のやうに見てゐたが、あのくらい孤獨に腐蝕された顏を曾つて見たことがない。それは蒼白で疲憊した顏色でなく、陷ち窪んだ眼窩のうす暗く、墨取られたそれでなく、又、垂れてがつかりしてゐるやうな鼻付ではない。相貌全體にゆき亙つた一種の痙攣された歪みで、そしてだらしなく何時も開けられた口もとが、いつも好人物のそれのやうに薄笑ひを漂はせてゐるそれである。何となく莫迦莫迦しく、たよりなげに、いつもにやにやしてゐる

やうな調子である。どこを抓んでいいか分らない、その上、決して誰と廊下であつても必らずその日の挨拶をするが、そのかはり對手を自分の室内に招じてお茶の一杯も出さうといふ氣は全然ないばかりでなく、決して他人を自分の室へいれないことである。女中でさへ彼の部屋には箒を加へない。

彼自身は非常な病的なほど潔癖で、朝晩掃除しなければ氣が濟まないらしいのである。そして彼は挨拶するときでも、話をするときでも臆病げな目付で、その顏付のだらしいのない柔和とは全然反對のちよいとした暗い目付でぢろりと對手を見るくせがあるのである。絕えず何人かを疑つてゐるやうで、かなり不愉快な一瞥である。そして對手を放れると、何かしら一言獨り言をするに決つてゐるやうである。あなたは呼びかけられたのではないかと思はれる位、大聲でやるのである。

わたしは、それらの獨り言が、よく獄中のひとびとが好んでやるやうに、また、わたし自身でも時々つまらない所在なく寂しいときにそれをするやうに、彼にとつては完きまでに慢性になつてゐるやうに思はれたのである。なぜと云ふに、彼自身は厠とか洗面所とか食事とか、さういふ時にさへぶつぶつ呟くからである。それが一たい何を言つてゐるのか薩張り解らない。目白なぞの啼きのよい値の高價なのになると、むろ啼きと言つて、こまかく宛然人間のやうにつぶやきが珍重されることに於て有名であるが、わたしは、よく彼の獨り言がそのむろ啼きといふ、つぶやきに似てゐることを感じてゐた。籠中の目白はおもしろいから啼くのではない、誰か自分の仲間を呼ぶのか、それとも彼のごとく自分自身の口から、空氣にいちど觸れた自分の聲を聞き恍れる類ひか、それとも全然無意識でつぶやくのかも知れない。人間のうちでも子供がよく獨り言をするものである、七八歳くらひの子供は、材木の蔭とか、人家の門の際とか、また樹かげに蹲みながら、よく誰もゐないのに喋るものである。それとも、ずつと嬰兒になると殆しきりなしにそれをつゞけるものだ。そして青年時代に飛んで、初老からそろそろ獨り言をいひはじめるものに違ひない。

概してこれはわたしだけの考へであるが、獨り言をするほどのものは、非常に厭人的傾きをもつてゐるものである。それと言つて彼の場合は、毎朝挨拶するやうに別に人を厭つてはゐないが、その怯ついてゐる目付は、決して他人の爲めに何事をするといふことはなく、又他人を愛しようとする努力も氣分も 持つてゐない。なるべく、できるだけ 他人と交際はないやうにしてゐるやうである。他人が恐ろしいからでもあらうか、わたしの考へによると、かれ自身が人とつき合ふことによつて、知らず識らずのうちにかかつた病的な或物がそこなはれることを厭つてゐるからだと思へる

からである。他人と話をすれば物質的損失もあり得るといふ目安もあるが、是よりも先きの病的な或るものの故であるといふことが正確らしいのである。かれは獨り言をすることに據つて友人を。たくさんに持つてゐるやうな、無自覺なサイコロヂィの魔藥を吸つてゐるに違ひないと思はれるのだ。では、ここに疑問をおこすのは、さういふ人間に人情や性慾がないかといふことである。

が、彼の場合では、あきらかに性慾をも人情をも多分にもつてゐるが、恐らく彼は結婚したこともなく、珍らしく、眞に珍らしい童貞者であるといはれてゐることである、わたしはそれを決して信じないが、あるひは××常習者としての孤獨の歪んだのではないかと思はれるのである。わたしはその常習者といふもの丶全ての顏色が異情に不良いといふより、その目付の濁つてる點からではなく、唯、その常習的慢性者は決して結婚の必要なきまでに中毒されるといふエリスの哲學的根據ある性慾心理を信じるが故に、實際に於てそれが非常に多數なるが故に、また、さういふ中毒者は結婚後もなほそれを繼續せずにゐられないために、或ひは彼の場合は、その病的な獨語を起點としても充分その中毒だと思はれるのである。

彼のところに曾つて女客のあつたとがなかつた。そして彼自身も一度も外泊した事實のなかつたことから、わたしはいつもさういふ目をもつてかれを眺めてゐた。

ちやうど、この準牧師も彼のやうに慢性ではないか、明らかな症狀をもつてゐることは事實である準牧師は、何よりも第一に獨り言をするときに、さきの初老者のやうに戸を閉めきつて言はない點が異つてゐる。かれは必らず障子を開けて、誰かが開いてゐるやうにするのである。あるひは自發的に何人かに開いてもらひたさにするのかも知れない。それが決して演說的口調であることはいふまでもない。

彼自身も殆來客などといふものを有たない。殆、一人きりで、その背廣服一着きりといふ簡單な、多くの貧しい下宿人のそれのやうに、所持品といふものを有つてゐない。日曜は朝早くでかけるが、へいぜいは鳥渡午後から出掛ける外たいがい室内にこもつて、極めて遇々獨り言をやつてゐる。その間ぢゆう讀書してゐるのか、それとも他の仕事をしてゐるのか分らない。退屈さうに中庭に向つて獨り言をするくらゐである。やはり蒼白い瘠せた、何處か疳癪持ちのやうにじりじりしたところがある外、これといふ明らかな特長がない。

當の本人よりも、わたしは彼の獨り言をきくと、れいの三十年間下宿にくすぶつてゐる初老者を

思ひ出し、それの慢性に次第に近づいてゆくことが餘りに目に見えるやうで恐ろしかつたのである。吃音者を模倣ね過ぎると完全にその症狀を起すやうに、又、眞性の發狂人でなくとも、普通の人間を精神病院に入れ、あらゆる手續きを發狂人らしく取扱ふときに、不思議に眞性に近い精神病になり易いやうに、準牧師が次第にその發作を續けてゆくうちに、しまひには、どうにもならない獨音患者になることが、私の目には日を趁ふて明らかになつてゆくやうに思はれたのである。現にわたしは三月一日に下宿し今は冬の初まりかけてゐるが、準牧師の獨り言は、その三月ころに較べると別人のやうに混亂され重患になつてゐることである。はじめは人の氣を引くくらゐであつたがこのごろは殆それがすぐさま精神病者でないかと思はれるくらゐ、顯著になつてゐるのである。

わたしは――物好きと退屈と陰氣と讀書とに閉されてゐるわたしは、そしてそれらの絕え間ない苛責のもとにゐるわたしにとつては、ただの一度でも準牧師の獨り言の內容といふものを知りたさに、どれだけ耳を澄したか分らないほどであつた。ものの注視といふ點から完全にわたしは是れに盡してゐたが、曾つて一度も言葉の中身を知ることができなかつたのである。早口であることは勿論だつたが、その早口にも明らかな病的韻律と曖昧さが充分に含まれてゐるため、つまり『われわれは……』といふこと言葉と『神』といふのと、そして『なけねばならない。』といふ位しかわからなかつた。『ならない。』といふ調子は必らず一句ごとにつき纏つてゐた。しまひに『ならない。』といふ言葉が、な、ら、な、い、といふ風に膏藥のやうに、わたしはわたしの部屋の壁の地にハツキリ黑々と描くことができたのである。それは朝からくりかへされるため、すくなくともわたしはわたしの陰氣な室內で、ほとんど一年間それを聞き倦きてゐたからである。ふしぎにわたし自身にも準牧師の獨白によつて絕えず惱やかされる弱り切つた心臟があつたからである。獨白の歇んでゐるとき、古い、寂漠とした宿屋に音もないやうなときに、わたしの弱り切つた心臟もまた呟やくやうになつてゐたのである。

「間もなく彼奴がしやべり出すだらう。間もなくであらう。だが、すぐ初めるかも知れない。ひよつとすると朝にくらべて漸らく位歇むかもしれない。どつちにして初まるには初まるだらう。」

わたしのこの呟きが終らないうちに『な、ら、な、い。』が初まるのである。東北地方の辨濁があるため『な』が單なるそれではなく、重い語尾を引いてゐるのである、それは陰鬱で宿命的でそして非常に不愉快であつた。といふよりも、その喋つてゐるうちより、最初にもう初まるだらうと思は

れる瞬間に、折あしく獨言が切り出されると、わたしはわたしの期待が一種の恐怖であつたためか實際心臓のところに冷たいものを感じるほど、時には全身をぴくつとさせるほど、臆病なほど吃驚したのであつた。濡手拭を當てられることを知つてゐて、なほそれの冷やりとした感じに胴震ひする厭な感覺のそれであつた。それゆゑ、わたしはわたしの室のいたるところで、矢のやうな鋭角さで鈍痛をかんじる獨り言によつて絕えず惱まされなければならなかつた。

わたしは、いゝ加減にしろとか、よせ、よせ、とか、何のために喋るんだとか、

「一たい彼奴はおれに何の怨みがあるのか、そしてなぜおれにばかり聞えるやうな獨白をするのか、なぜおれがこの春以來そればかりを注意しなければならなかつたのか、おれとあいつとは何の因緣もないのに、おれは彼奴のためにしよつちう惱まされてゐるのはどうしたことか。」

そして彼奴はかういふ風に、わたしがわたしの部屋で惱まされることを知つてゐはしまいか、きやつの障子は何時もわたしの方へ向いて開いてゐることを考へると、彼奴はその何も彼も知つてゐて始めてゐるのではなからうか。彼奴は微笑つてあいさうをするが、卑屈なとうていわたしだちに出來ないやうな低い腰つきで、そして、へり下つて挨拶はするが、第一きやつは一たい……わたしは、さういふ風な問答をわたしの心で次第に日にしげくするやうになつたことを知つてから、實際わたしにも遺つてきたらしい孤獨症の初期の痛みだ心肉にかんじるやうになつたのである。

なぜといへば、わたしは最近ではふしぎに（ずつと以前にも傾向としてはあり得たが）廊下で會つても、誰にも挨拶することもなく、また立話なぞもしなくなつてゐた。顏をみるのさへ厭な氣がして、何となく外方を向くといふ傾きがあり、女中なぞが來てもついぞ口をきいたことすらなかつた。それに老青年や準牧師のそれと同じいやうに、わたしの部屋に遊びにくるやうなものは殆無く、また、それを求めもしないわたしは、自分の方からなるべく知人朋友に遠退いてゐるやうにこころかけてゐるため、誰一人わたしを訊ねてきてくれるものもなかつた。街路や電車のなかであつても、なるべく自分の住所をあかさないやうに、若し詮方ないときには番地を逆にして敎へたり（それは殆ど何氣なく、すこしも腹の中でたくらんでするわけではなかつた。たゞ、さういふ憂鬱な常套手段がいつも繰りかへされてゐたのである。）町名をあべこべに言つたりして胡魔化してゐた。さういふ心にもない。併し必要な嘘をつくごとに輕い安堵をかんじ、その人が訪ねてきても分らないといふ氣もちは、かなり寛ろいだ氣になられた。それゆゑ、わたしの室でまだ誰とも話したこと

がないのである。何處で何をしてゐるか解らないやうなわたしの生活は、田舍の親だちさへわかりかねるほど、わたしはわたしの住所をどこへもしらさずにゐた。たとへば人に會ふとその人の眼色や氣分や仕事なぞのことが氣にかかり、話してゐるうちにこちらの心がそれの準備のために騒めくだけでも、わたしにとつてかなりな擾亂であつた。わづかなことにも神經深く細かく動きはたらくわたしの心は、たとへば女中の、膳だの茶器などを洗つてきても、それをすぐ美しい清潔なものとして信じ兼ねたのである。それゆゑ、わたしはわたしの手で熱湯でそれを一度ゆすがないと口をつけられなかつた。それがため、さういふ事にも心が亂れかけるのが苦しかつた。

　ではわたしは一たい何をしてゐるのだ、終日、退屈に腐蝕されながら本を讀むとか、物を書くとか散歩をするとか、人と話すとかと云ふこともなく、ただ、坐つたきり、よごれた剝げたやうな硝子戸越しに、冷たい冬の日の晴れた屋根のつづきの空をながめるとか、しよつちう何かを考へるとかしてゐるわけではない。ただぼんやりしてゐるだけである。おほ方は床のなかに沈みこんで、目を開け不安と憂慮とになやまされ、なやまされることによつて弱められた、しよつちう、びくびくしてゐる心臓を抱いてゐるばかりである。では何が不安だと問ふ人があれば、わたしはわたしの暮しがうまくゆかないのを第一にいふであらうが、それよりも、さうして横臥して何にもしずにゐるといふ退屈な一事が、不安であるともいへるのである。何となく、それは決して目標のないその日ぐらしの遣る方もない一日づつを、詮方なくさうして四角な陰氣な部屋に送らなければならないといふことが、さも倦き倦してゐるし、さもしくて耐らなかつた。が、もつと明るい部屋のある宿へ移るとか、その明るい世間へ出てはたらくといふ氣なぞは絶對に起きてこなかつた。さういふことはわたしにとつて胴震ひするくらゐ厭なことであつた。それよりも一日でも怠け切つて沈み込んでゐる方が溫かで、安心ができ、心をさわがさなくていいのだつた。わたしに調和があるとすれば、やはり一間の窓と二方の壁と、きたない天上と、そしてやはり準牧師の濁り言に毎日なやまされてゆくくらゐだつた。それは實際、さむさに向ふと均しく、毎日のやうに牧師の病氣がひどくなつてゆくやうだつた。もしわたしが今一二年前のわたしであつたら、きつとその病氣がじつに恐ろしい宿命的なものであり囘復しがたいものであることを注意したかもしれなかつた。だが、いまのわたしには、さういふ氣が起つても、それを先方へ、知らせるだけの好意はもつても、かれの四角な面構ぇをみるだけでも並大體(たいてい)な我慢ではなかつた。それゆゑ、わたしはかれの病氣が重くなるのをみすみす眺め、

ただそれが當然さうあるべきものとする外仕方がなかつた。

だが、さう言つてゐるうちにも、わたしはわたしの內で、ふしぎに何ごとをか絕えず呟くやうな氣がすると、必つとわたしも獨り言をするであらうといふ想念を有ちはじめ、あはや獨り言をしかからうとしては止め、またそれによつれ惱まされたやうなことが、終日わたしの物憂い身の上に起りはじめるのである。わたしは詰らないことを考へてはならない。さうわたし自らに向つて囁くごとにわたしは冷やりとしたのである。人間の極度な孤獨といふものは發狂しかねまじいであらう徵候を、わたしは決して考へられなくなつてゐた。なぜといふに、わたしはわたしの獨白が日に幾たび繰り返されるものであるかといふことを、しだいにわたし自身がかぞへ始めたからである。

「いまお前に何かを呟やく。お前はそれをせずに居られない。お前はそれの命令者に背くことはできない。お前はお前に似た宿命の幾頁かづつを喋らずにはゐられないのだ。」

わたしはさういふ聲を、わたしの內部で聞いた。だが、わたしはもちろん、それには服し從はない。第一わたしの暗い宿命がさうも早くやつてくる氣がないので、健康者に死の豫想がばかばかしいことであるやうに。だが甚だしくひそかに不安であるやうに、わたしは依然すこしづつ疑はずにゐられなくなつたのである。

「命令者といふものが、おれの外に何かゐるのだ。おれがおれの精神の持主であるのに、かくの如く正確な持主であるのにしかも命令者とは、どこのど奴だ。もしそいつがおれの精神のなかにゐて、おれにそむいてゐるのであるとすれば……。」

わたしは冷笑つた。むしろ冷笑ひにあたひすべき戲愚であるからだ。

「おれの精神の內部で、實際おれに反いてゐるものなどあらう筈がない。赤ひひと色であり得るわたしの心が、青や白であり得ないのだ。だが……。」

わたしは考へた。人間の思考のなかで、自分を裏切つたものがあるとすれば、喋るまいといふ意志と、しやべりたい意志といつも二つがあるとすれば、惡は惡をもつてコヂれ育ち、善は善をもつて溶けあふといふことは、さうだ、それはあり得る。そしてそれが一切の精神であるとすれば。

わたしは冷笑ひ出した。わたしは判つたやうな氣がした。わたしは吻と一と息ついたのである。がその瞬間に暗いこゑでまさしくわたしはわたしの內部でささやいたのをきいた。

「も一つ命令者がゐるのだ。」

わたしは顔ぢゆうを歪め、あるかぎりの冷笑を催しかけた。

「神かい。」

「いや。しかしその意志は捧げられない意志だ。」

「ではそいつもおれの中にある意志だな。おれの内部にある――。」

「さうだ。きさまのなかにあるのだ。」

わたしは、わからぬまま、座つて耳をすましてゐた。そのとき階段の上で誰かが立停るやうなスリツパの音がした。わたしは耳を立てた。も少しのことで聲を立てようとしたくらゐだつた。その音はなかなか消えなかつた。戸のすぐそばつた。ひつそりとしてゐた。ゐるのかゐないのか分らぬほどだつた。わたしは戸のある方へ躄り寄つて行き、戸に耳をくつつけた。わたしは耐らなかつた何かいはなければ居られなかつた。默つてゐると凝乎としてゐる心臓が、ブチ壊れるやうな音がした。わたしは胸に手を當てて靜かにたづねて見た。

「そこに佇つてゐるのは誰です。そして何の用事があるのだ。」

スリツパの音がすうと板敷にすれる音がした、わたしは心臓をさわがせまいと、それのみにあせつた。息づまるやうに外はひつそりしてゐたのだ。――わたしは、仕方なしにおそるおそる戸を開けて見た。誰も立つてゐなかつた。

「たしかに誰かが居たのだつたが、それとも氣のせいだつたのか。」

わたしは廊下へ出てみたが、やはり誰もゐなかつた。そのときれいの老青年が、古い表門からかへつてきて、音のしないやうに自分の部屋をさして、寂しくあるいて行つた。あいつではない。あいつは何てへんに寂しく歩いてゐるのだらう。

わたしは部屋へ引きかへして、じつとしてゐた。空氣のなかにでも何かこもつてゐるやうで恐ろしかつた。目にみえないものが重りかゝつて仕方がなかつた。何もないのだ。さう考へても寂しかつた。

そのとき再びわたしは戸の方に、ひつそりと忍びあるきするやうな足音を聞き、それをかぞへながらゐた。あきらかに人間の足音に異ひない。わたしは又た戸のそばへ寄つて行つて耳をかたむけた。やはりスリツパの音がした。もうわたしは少しの餘程もなく戸のそとへ出た。

戸のそとに、準牧師が蒼白い瘠せた顔をして立つてゐた。わたしは吃驚りして、唾をのんで見が

まへをした。何か言はうとしながら急に言葉が出ないため、いくたびとなく躊躇つた。

「あなたですか、先刻からわたしの戸の前を往つたり來たりしてゐるのは――いやあなたに違ひない。」

なぜだと云へば、あなたより外に誰も立つてゐないからだ。さうわたしは言つて、かれの顔をじろりと眺めた。準牧師の目は、やはり卑屈な柔和に怯々した、むしろ鮒のやうにびくびくした目いろをしてゐた。わたしが突然飛び出したのに、一方ならず驚いたやうなところがあつた。

「わたしです。ご勉強をさまたげをして濟みません。ですがちよいと……。」

わたしは、準牧師の聲の終らないうちに、口を開いだ。

「何か御用がおありですか。それとも遊びにでも。」

「遊びなぞといふことはありません。ちよいとお訪ねしたいことがあつてやつてきたのです。」

準牧師は、その遊びといふ言葉をつかふときに、いくらか冷笑ひをその唇の上に浮ばした。それはわたしの氣持ちを苛立たせるに充分であつた。

「どういふ用事です。ご遠慮なく言つて下さい。」

「さあ――」

準牧師は、いくらか當惑したらしく眉をしかめた。「實は詰らないことなんですが、些と氣になることがあつたものですから。」と言つて、目をわたしの視線外に外らせた。

「どういふ事です。早く言つて貰はないと不愉快ですが、わたしは漸つと起きてゐますが誰とも話をすることを厭がつてゐる氣持ちがあるのですから、なるべく早く、その用件に觸れて下さい」

わたしは煮えきらない彼をいらいらしく見詰め、早く自分の室にはいりたい望みをもつてゐた。何故といふにわたしはこの男の家では、もう頭ががんがん仕出したからである。だいぶ永く人と話したことがないので、弱り切つた心臓はそれ自身の鼓動をわたしの耳もとで鳴りはじめたからである。

「いや、わたしにしても縁もないあなたとお話をするのは不愉快です。不愉快ですが念の爲めにおたづねしようと思つてやつてきただけなんです。」

「ですからその用件をお話し下さいつて先刻から言つてゐるぢやありませんか。あなたは問題外のことばかり被仰つてゐらつしやるぢやありませんか。わたしは左ういふ間だるつこいことは耐

らなく嫌ひなんですよ。」

「わたしとてもさうです。あなたの不愉快はわたしの不愉快ですからね。」

わたしは、かつとして最うすこしで飛びかかるところだつた。が、わたしは不思議にこらへることが出來た。

「そして用件は。」

「その用件といふのは極く平凡なことです。氣をわるくしないで聞いて下さい。氣をわるくされるとわたしの方で話しにくいことなんですから。」

「承知しました。さあ關はず話してください。」

實際、わたしの心臓は、この二三年このかた、今日ほど擾亂されたことは珍らしかつた。わたしはわたしの心臓が、とうてい完全な形態と健康を保持することの非常に至難であるべき、或る病的な豫覺に胴震をしないわけには行かなかつた。

わたしは、再た急き立てて、その用件——恐るべき用件の提出を待遠がつた。準牧師はやつと口を切つた。

「ご存じでせうがわたしはよく獨り言をしますね。きつとご存じでせう。ご存じないといふ方はありませんからね。それを先きに御承知置き下さい。」

わたしは、はじめて、にたりと冷笑をうかべた。對手の惡感をそそのかすべく用意されたそれのやうに。

「知つてゐますよ。知つてゐますとも、あなたの獨り言は毎日ですからね。ときに甚だ不愉快で煩さく感じてゐる位ですから。」

準牧師は、そこで、にはかに顏色を變へ、すこし飛び上るやうな身ぶるひをして、口を切つた。

「あなたはですね。よござんすか。そのわたしの獨り言を眞似してゐらつしやるのは、あれは本氣でやつてゐらつしやるんですか。いや、からかひ半分にですな。恰もわたしの愚劣を冷笑なさるそれのやうに、毎日あなたはわたしの口眞似をなすつてゐらつしやるのだ。」

わたしは意外なかれの提出した問題の前で、立ちどころに赤くなつた。なぜといふ事もなく、あまりに突唐で不自然で突飛だつたからである。何といふ愚直な質問であらう。わたしがかれの口眞似をしてゐるといふことは、實際何人も否といふに違ひないのだ。わたしは默つて室でくらしてゐる

るのだ。これは實に意外だ。

「あなたはどうかして居はしませんか。たとへばわたしがあなたの口眞似をするにしても、それほどの莫迦者であるにしても、さういふことをあなたの前で白狀するほどの莫迦ではありませんよ。詰らない。何て詰らない質問だ。」

わたしは、そこへ唾を吐いた。わたしの頭は混亂した。

「いや、その詰らなさがわたしにとつて毎日不愉快な思ひをさせるのです。わたしは喋るごとにあなたが口摸倣しないかと心配するのです。生れたばかりの嬰兒の命名を足蹴にするやうな氣もちになるんです。わたしはそれが耐らない。」

わたしは我慢がならなかつた。ちよつとの間でも此ひよろ長い、蒼白い男の饒舌がたまらなかつた。

「僕はもうとくに君には倦きてゐたのだ。早く去つて下さい。どうもさういふ詰らないことを言はれると困るのだ。」

「わたしは行きますよ。しかしですね、よござんすか。」

彼れは又何事をか話し出さうとした。それゆゑ、わたしは一刻も怺へてゐられなかつたので、戸の前へ立つた。

「さあ、行つて下さい。僕はあなたの對手にはなれませんよ。」

準牧師は、實際そのとき初めて、夢からさめたやうな顏をして、わたしの前にぼんやり立ち竦つた。

「わたしは今倚をいひましたか。」

わたしは、その聲音の終らないうちに、バタンと重い戸を内部から閉め切つた。そしてわたしは身ぶるひをした。蒼白い幽靈。あいつはそれだ。だが、あいつはわたしがあいつの口眞似をしたといふことを言つてゐた。わたしはそれを考へ出すと恐くなつた。わたしが知らず識らずあいつから病氣をうつされはしなかつたかと、それが恐怖かつた。

準牧師は、まだ戸の前に立つてゐるらしく、スリツパの音をこそこそさせてゐた。わたしは戸のそばに寄つて、れいの心臓をおさへおさへ、かれの去るのを待ちかまへてゐた。が、かれは何時までも去らうとせずにゐるらしかつた。

わたしは再び耳を立てた。まだかれは去らうとしなかつた。わたしの心臓はそのときへとへとになり、もう吐息するさへも物憂く、そして限りなく眠りを催してゐた。早くしづかな床に沈みたかつた。しかし、かれの立つてゐる間は、さう床中に入ることが許されなかつた。もぞもぞと藁屑のやうな音がつづいたり歇んだりした。

「去れ、わたしの幽靈。」

わたしは、さう言つて、じつと耳をすました。物音はなかつた。しんとしてゐた。わたしはすこしづつ戸を開け、廊下の方をながめた。夕日のかげもなかつた。もちろん、準牧師の姿もなかつた。戸は全く開け放たれ、わたしは廊下へ立つて出た。屋根は褐色に沈んでみえ、中庭の土の上はもう暗かつた。わたしはもう一度聲を出して、何ごとかを呼んでみた。あたりに誰もゐなかつたが、表の古い門の戸があき、れいの、老青年がぐつたりしてかへつてきたのが目にはいつた。音もなく歩いて、階段の下へかくれた。準牧師の室の戸は閉められ、音すらなかつた。その他一切何ごとも起らうとせずにゐた。平和で靜かな晩景がひろがりはじめてゐた。わたしは部屋にかへると、心臓をおさへおさへ疲れたからだに深い眠りをさそふた。なにごともなかれといふ懶怠をいのるやうにつつましく睡りについたのである。

そのとき、わたしは再び耳もとで、煩さい囁きが繰り返され、しきりにわたしを呼びさます聲をきいたのである。疑ひもない、ひよろ長い準牧師であつた。わたしは默つてゐたのである。あまりに煩さく、限りなく喋られるからである。かれは、しまひにはわたしの肩に手を置き、そして搖り起さうとするのである。

「わたしを起さずに置いて呉れ。わたしは眠いのだ。君はわたしの眠りをさます權利をもたない部屋のそとへ早く出て行つてくれ。」

わたしは起き上らうとせず、物憂い目を上げたまま言つた。そして「一たい君は何の用事があるのだ。」と、さうたづねた。かれは、相渝らず煑え切らずに、ぐずぐずしてゐたのである。

「君とは何の縁もないのだ。縁のない奴がなぜ部屋へはいつてくるのだ。」

「何の縁もないと……。」

「全くだよ。わたしは君の 顔をみるだけでも 厭な氣もちだ。早く出て 行つて呉れ。わたしの幽靈。」

「ふむ、幽靈だと、そして君はその何ものだ。」
わたしは、戸が半分、すうと開きかかつてゐて、夕方の、蒼白い光線が、廊下一杯に、わるいボロ幕のやうにかかつてゐるのを眺めた。先刻から、何處から這入つてきたのだと思つてたゐが、やはり戸の方からだつたかと、はじめて氣がついた。
「わたしは君の見たとほりの懶怠け者だ。わたしは、人にさまたげられずに睡つてゐたのだ。その他の何者でもない。」
「ふう！　そして君がわたしの口眞似をしてゐるのかい。さうして床の中にうづくまりながら！。」
わたしは、悸然とした。さつきから眠つてゐたのだ。この幽靈は何をしつこく言ふのだらう。
「いつわたしが君の口眞似をした。わたしは眠つてゐたのだ。」
準牧師は、低い、あるかないかの聲で、冷笑つてわたしの言葉を揉み消すやうにした。そして一層卑屈にくすくす擽ぐるやうに笑ひ出した。
「眠つてゐらつしたと――あなたは卑劣な方だ。先刻からあれほどわたしの口眞似をしてゐたくせに、あなたは卑怯にも嘘をいふのだ。男らしくお返事をしていただくことにしませう。」
「わたしが嘘を言つたと――。」
わたしは騷ぐために鼓動の烈しくなる心臓をおさへおさへ――實際、非常に深酒したあとのやうに心臓が激く高鳴つて仕方がなかつた。こんな瞬間がこれから十分と續いたら、わたしはそれ自身によつて死ばつて仕舞ふにちがひない。
「わたしはまだ君に嘘をいふほど、君と話したことがないのだ。君は何をゆすらうとするのだ。」
かれは、そのときわたしの宛てゐる手つきを凝視した。わたしは、わたしの手の平で、恐怖と不安とに萎縮しながらゐる、あはれなわたしの心臓をおさへた。準牧師は、何かわたしに昂奮させさせることによつて心臓を目がけて何かを計らんでゐるやうな氣がした。
「僕はゆすりではない。神聖な神の使徒だ。」
「それが何故わたしの心臓を目がけてゐるのだ。きみだちは皆心臓のゆすりだ。安眠のゆすりだ。」
準牧師は、また一つくすりと笑つた。そして何事かを話し出さうと、れいの、茶色の、正直さう

にみせかけてゐる、じつは獺のやうな小粒な目を動き出さうとするのを見ると、わたしは床の上へ飛びあがつた。わたしは、實際、そのつら構へと、善人振りと、その根底に滓のやうにこびりついてゐる猾さとに、今は耐らなかつた。

「さあ出て行つて吳れ、神の使徒、そして神の批評家で、雜誌の拾ひ讀みで說敎をしてゐる正義の殉敎者よ、早く出て行つてくれ、そして貧乏人と群衆と、きさまの子供らに賞められて吳れ。」

わたしは、かれの前に立ち塞がつた。わたしの心臟はばらのやうに燃えあがつた。永い間默つてしまつて置いた數多い言葉が、火花のやうにあたりに散つた。わたしは、かれの襟首をつかんだ。ちからを込め、そして一ト突きした。

「僕をどうするのだ。」

かれは、凝然とわたしを眺め、そしておこりのやうに震へ出した。さあ、新時代の僞善者よ、

「出ろ。」

わたしは、かれの、ひよろ長い腰をトンと衝き放つた。かれは中心がとれないやうに、ひよろついて、戸の上へ、よろめいて立ち停つた。

「出ろ、夢識症者。」

わたしは再び、かれを逆に戸の裏から、かれを靠らせたまま、ちから一杯、バタンと閉め切らうとした。かれは動くまいとして身悶えたした。かれは足にちからを込めたが、もうそれは遲かつた。戸は閉められた。わたしは、がちりと鍵をかけ、隙間なくぴたりと戸のきしみを合せ、ほつとした。心臟は鳴り出してゐた。燃えてあつくて耐らなかつた。——準牧師は、戸のそとでまだ何か沸々いひながら、なかなか去らうとしないらしく、ぐずぐず足音をさせてゐた。

「早く消えてなくなれ。」

わたしは、さう戸のうち側で呼んだ。すると外でも同じやうな呼びごゑが、殆、間髮をいれずに起つた。が間もなくこんどは正確な靜寂が戸外にきてゐた。わたしはわたしの臥床に近づいた。ときはもう夜になつて、窓のそとの樹は蝙蝠のやう黑く、瘠せた枝々を伸してゐた。その枝々を凝視してゐるうち、わたしは、不意に執念深い睡眠が次第に、わたしの瞼を重くしてくること、そしてその倦るい睡りのうちに漸次わたし自身が例令へば深い何ものかの底へ打沈んでゆくことを感じてゐた。

金色の蝿

花屋の裏二階を借りてゐる横山のおばさんが、母が近所へ無駄話をしに行つてゐる間に、裏庭からよく這入つてきて父に煙草を喫ませたりしてゐた。おばさんは、五十を出てゐたが、ふくぶくとして血色も冴えてゐた。

むかしから家の爲事をしたことのない母のおさとは、四年越しに臥たきりの父の看護に飽き切つて、横山のおばさんや、隣の菓子屋の夫婦が世話を燒くのをいゝことにして、朝のうちから近所廻りをしてゐた。それ故、横山のおばさんは、裏口から、暗い座敷へはいると、すぐ聲をかけた。

父は、暗い奥座敷の床の間を頭にして寢てゐた。

おばさんは、坐るとすぐ煙草を揉んで火を點けて、それを父の口もとへ吸はせた。煙草のすきな父は、うまさうに濃いけむりのなかから、耳障子で、見えない目を瞬かせた。

「たんとおあがりなさい。もう一服おつけしませうか、」

おばさんは、少し顔をさしつけるやうにしてかう聞くと、また指さきでくるくると煙草を揉んだ。それもこなつぽくなつた粉煙草で、濕つてゐた。

「どうも毎時濟みません。煙草も臥てゐると樂しみの一つなんです。」

父は、まだ烟管が口元へ當てられないさきから、ぱくつと餠のやうに口をあけた。おばさんはこつそりと微笑んだ。あたりに誰もゐないだけの微笑みは靜かに彫つたやうに浮んだ。

「おさとさんもおさとさんだ。朝のうちから何處を歩いてゐるんですか。」

おばさんは、又、凭れかかれるやうに夜具を三ッに折つて、ふつくりと靠れごこちのよいやうにして、「そつと凭りかゝるとよござんすよ。さうさう、お樂になるでせう。それからお頭を上の方へのせるやうになさい。あ、さう、さう。」

靜かに脊をもたらせるやうにした。父は樂さうに、すこしばかり身體をそらせて、伸びあがるやうにした。

「あゝ、いい氣もちです。」

さう言つて手を膝の上に組んでゆつくりと胸をひろげるやうにして見せた。

父は濃い煙草のけむりを味はひ深さうに吐きながら、言ひにくさうに話し出した。

「あれも永い間のことで飽きたんでせうよ。わしにしても、やはりしまひには厭になると思ひますが。」

父は、遠慮深くかういふと、おばさんは、やゝ急き込んで、いつも母のおさとにする非難めいた口を挿はさんだ。

「いくらなんでも朝のうちは家にゐるもんですよ。それにもう出掛けてしまつて ゐるんですもの。」

「それもさうですがね。何と言つてもあれには分らないし……。」

おばさんは、すこし齒痒いやうな氣もちで父をながめたが、それも仕方のないことだといふ氣になつて默り込んだ。大寺を弟子兄弟にゆづつて隱居はしたものの、これまでのやうな收入は、みな弟子兄弟の方に吸ひとられて、あてがひ扶持で、藥代にもならなかつた。おばさんは、やはりあのまゝで、寺は寺で、持つて居られればよかつたのにと、いつものくせで幾度もつけ加へた。さうすれば、こんなに不自由な暮しをしなくともよかつたのだも言つた。

「からだがもう駄目になつたものだから何と言つても動けませんでしたよ。だからつい面倒になりましてな。」

それでも、毎月の御命日には、一錢花の束が天井近くまで盛り上げられ、その置露だけでも手桶の底がひたひたしてゐた。その上、蠟燭臺に林立された明しが、晩は、くらい寺領の苫蒸した大梅の根もとまで行きとどいて、夜も降りたり上つたりする蟻の行列まで眺めることが出來た位だつた。それも思ひ出すごとに寂しかつた。

「いまになつてお母さんがお寺を讓るんぢやなかつたなどと言つて、ありや欺されたんだなどゝ言つて歩いてゐるんですよ。自分の惡いことはみな棚へ上げてしまつてですよ。」

おばさんは、八百屋の軒下や、髪結ひのところなどで、べちやくちや喋つてゐるおさとの姿を目に浮べながら言つた。ちよつとでも氣にいらないことがあると、思ひ切つて毒づくのが常で、ほめると、まるで、そこらぢうを賞めちぎつて歩くやうなおさとだつた。氣にいらないことがあると誰れ彼れのけじめもなく罵つたりした。その爲め、近所でもおさとのことを良く言はないで、病氣の父をいとしがる人が多かつた。

「そんなわけぢやないんですが、あれも不自由をしてゐるので氣が歪つてしまつてゐるんです。」

父は、なるべくその話にふれまいとしてゐるらしく、おばさんは、さういふときいくらか苛々しい氣になつた。ひとの善いのも、この人ほどになれば少し馬鹿じみてゐるとまで思はれた。「何を言つてもあれにはわからないし、もう何も言はないことにしてゐるんです。」と、さうおばさんは、聞くごとに、こんな愚圖々々した他人なぞをかまひつけないで、もう、この次から來るものかと、いつものやうな不滿な考へが今日も又た意地わるく浮んできた。

が、疊の上を撫で廻しながら煙管を捜してゐる手つきを見てゐると、それを見棄てたまゝ、すぐ立つて歸る氣にもなれなかつた。

「いまおつけしますよ。ぼんやりしてゐたものですから。」

おばさんは、煙草を指さきに揉みながら、自分が歸つたあとで、おさとが歸らなければ、それまで喫みたい煙草もそのままに我慢をしなければならないんだと考へると、やはり氣の毒だつた。

「お一人のときはどうなさるんです。お茶なんかでも。」

「がまんしますよ。もう馴れてゐるんですから。もう永い間のことですから諦めることは諦めて

ゐるんですよ。」
さう何氣ない風にいはれると。却つて、おさとが歸つてくるのを、的のない時間を的にして待つてゐるのが、小憎らしい氣も射してきてならなかつた。どうせ親切を盡したからと言つても、他人の空世話で、いまにも歸つてしまへばそれきり忘られてしまふやうな氣もした。まだ父が寺領に座つてゐたころから、出入してゐたおばさんは父の氣にも入つてゐたし、父もおばさんの顏を見ると大概はればれしくなつてゐた。
おばさんは、立ちあがつて
「またそのうちに――。」
さう言つて、また氣がついて、音樂時計にネヂをかけた。それは、いつも父の枕元においてあるので、ネヂがかゝると、最うすぐ梅ヶ枝の手洗鉢をうたひ出した。
「えらいお世話でした。」
父のさういふ聲をうしろにきいて、おばさんは、うすぐらい部屋から、ぱつと青くなつた庭木と日光の華麗なひかりに、いきなり目を射られたちよつと閉ぢて明けたときは、もう外光に馴れはじめた。健康な頬からうつとりと、女らしいあぶらが浮いて見えた。
「梅が枝の手洗鉢か、いやだ、いやだ。」
おばさんは、口のうちでさう言ふと、もう内弟子のお針子のきてゐる家へかへつて行つた。
間もなくおさとは、外からかへつてくると、夫のそばへ行つてみたが、すやすやと睡つてゐた。すぐ口癖でぶつ／＼初めた。
「ほんとに四年越しに病みつかれて休むときがない。すこしも手が離されやしないんだから。」
さういふと、佛壇の間の、冷し縁側にあつた機械瓶の口をがちやがちや鳴らしながら開けた。そしてコップに一杯つぐと、ひと息にぐつと呷つた。それが心からうまさうで、笹鳴きのやうに舌づゝみの音をさせた。
そのとき父はすぐ目をさました。そつと起きなほると、口をもがもがさせた。むかしから酒は嗜きだつた。
「いまかへつたのかえ。横山さんが來てくだすつた。」
父は、さういふと、靜かに流れてくる酒の匂ひを、あるかないかの空氣の搖れのなかに齅いだ。

齅ぐほど激しく鼻孔に刺戟した。

母は、尖つたこゑでぶつくさ初めた。

「ふん。用もないのに何しにくるんだらう。毎日毎日。」

父は、默つて、つらさうに酒の香をかいで唇をうごかしてゐた。それをじつと見つめてゐたおさとは、すぐ又喋りつゞけた。

「機械瓶の音さへすれば、さうして目をさましなさるし……あなたのお酒代ばかしでも大變だ。」

おさとは、ともすれば、かちんと引くり返りさうな瓶口の陶器の玉を左の手でおさへ、そつとコップに酌いだ。さはやかな音が烈しい匂ひを刻んで、あたりに濃く充ちわたつた。病人は、それと同時に顔面の皮膚をいちどきにひりつかしたが默つてこらへてゐた。

「四年越しにさうして寢てゐられると、たいがいのことでない。」

おさとは、さういひいひ、すこしづゝコップを口につけた。

「わしにも、ほんの少量でいゝが呉れんか。すこしでいゝが。」

父は、きれぎれに、今にもおさとが何か上へ乘りかゝるやうな言葉を叩きつけはしないかとびくびくして言つた。

「どこの國の病人がお酒をのみますかい。ほんとに。」

おさとは、今度は大びらに、機械瓶の口をがちやがちや音させながら、コップに酒をついだ。がそれが盛りあまつて疊のうへにこぼれた。おさとは、コップを手にとると、それを半分ばかりぐつと飲み干した。そして、父のそばへ持つて行つた。

「一杯あるんですよ。氣をつけてないと零れますから、ほんとに酒をのむ病人なんて世界中をさがしたつてありやしない。」

父は、コップを危なさうに兩手に抱くやうにして、すぐ口をつけた。が、それは半分もなかつたので、六分に傾けながら甘美さうに飲んだ。飲みながら父は、それが決して半分しか盛られてないことを知つてゐた。が、何も言はなかつた。

「寺を譲るんぢやなかつた。考へると本當に齒痒くて仕樣がない。」

おさとは、すぐ隣の寺の、箱段の上の鐸鈴の鳴るごとにさう言つた。いまも、靜かな午前におまゐりのあるらしい鐸の音が、かんがんと手にとるやうにひゞいてきた。

「お前が譲つたらいいと、しよつちう言つたからだ。さうでなければまだ持つてゐてもよかつたんだけれど。」

父は、ぽつりとさう言つて、音の澄んだ鐸の冴えをききすました。緑青を噴いた、古い鐸であつた。

「わたしが何と言つてもあなたが甲斐性がないからですよ。いまになつてわたしのせいもおかしいことだ。」

その當時、寺領の庭の五燈、本堂、奥の院へかけての十二燈の種油だけでも、みいりを食ひ込むといつて騒いだおさとは、自分からすすんで越前から弟子兄弟を呼んで、わづかな隱居料に目がくれてあとさきの考へもなく譲渡したのだつた。夫の名をつぐ三吉にも、默つて本山への届も濟まして了つたのだつた。

父は、おさとへは答へないでコップの雫をきると、それを甘美さうに味はひながら下へ置いた。

「いまから何を言つたつて追付かないことさ。あのときもわしが諄いほど言つて置いたんぢやが……。」

また、ぽつりとさう言つたが、おさとは、諦めかねるやうに舌打ちをして、自分で又コップに酌いで呷つた。父は、また煙管をさがしながら手にとると、燐寸の在處がわからないので、そこらを手さぐりにしてゐた。おさとは、それを目尻で見ながら立たうとしなかつた。

二

鐸鈴は、やはり絶えずかんかん鳴つて、お參りの足音も睡氣にきこえる、物寂かな寺領の正午過ぎがやつてくると、おさとは又近所へ出かけた。

茶の間と父の寢てゐる奥座敷とのさかひにかけた定紋竹の暖簾のすき間から、往來を透いてくる明りが、玄關から射し漏れてきてゐた。そこから蒼白い父のねがほが透いてみえた。

三吉は、ぼんやり草臥れて這入つて來た。四五日前歸郷したかれは、三年越しに見た父が、思ひの外、衰弱しきつてゐるので、長いことがないやうに思はれた。かれは、父のそばへ寄ると、いつも默つて坐り込んで、煙草をつけたり茶を淹れたりした。

「あ。お前か。」

父は、さういふと、きせるを口にあてた。蒼白い、品のある隆い鼻を、三吉はその見えない目と一しよに眺めた。枯老しきつた顔全體が頬の落ちや眼のくぼみそのままでも、彫刻のやうな冷やかさと刻みこまれた皺とからなり立つてゐた。

「お母さんは。」

「ちよいと外へ行つたやうだが、すぐ歸るだらう。」

三吉の、氣を兼ねてさういふと、國もだいぶ變つたらうと訪ねた。

「すつかり變化りましたね。むかし子供だつたものが皆一人前になつたりしてちやんと店さきに坐つてゐますよ。」

三吉は、そういふと、ふと、父の呼吸が酒の香を交ぜてゐるのに氣がついた。竹縁の方をみると今朝出かけるときに、機械瓶に半分以上もあつたのが、もう、底のほうにひたひたするばかりになつてゐた。いくら好きでもからだに障つていけないと言つても聞かないのだ。

三吉は、座を立つて、竹縁の、機械瓶のれいの陶器の口を音させてみた。わざと、さうしておいて父の顏を見てゐると、すぐ皮膚かひりついた。その上、膝を乘り出すやうにした。その上、きまりわるさうにもぢもぢしながら低い聲で。

「すこし貰へないかな、まだあるのなら……喉が乾いて仕様がない。」

三吉は、さういふ父が人の善さうににこにこした表情を見つめた。あんなに體軀が弱つてゐても酒が飲みたいものかと、着物がめくれて露みでた瘠せた膝がしらを淺猿しやうな氣でながめた。その膝皿の窪みが陰つてみえた。

「さつき飲んだんでせう。晩にまた飲むことにして止めたらどうです。からだに不良いんですから。」

父はすぐ返辭を仕兼ねて、もぢもぢと片手を疊の上についてゐたが。

「ほんの少しでいいのだから……先刻も半分だけしか吳れなかつたのだ。半分もあれば、澤山ぢや。」

三吉は、ひやりとした。母がまた何時もの惡い癖を出して、一杯だと言つて、半分しかあげなかつたのだらうと、いやな氣がした。

「コップにですか。お母さんが半分しか呉れなかつたといふのは。」

「うん。何時も一杯ぢやと言つておいて半分しか呉れんのぢや。」

　こちら向きになつて、いくらか告口をするやうな父の調子は、いくらか甘えたやうなところがあつて、子供のやうに遠慮氣でおづおづしてゐた。

　三吉は、默つてなみなみとコップに酌いで、それを靜かに零れないやうに父の手にもたせた。父は、すぐ乾いた老人らしい唇をコップの端にあてた。當てたところに酒がなみなみしてゐるので、心から滿足さうに、酒のみにありがちな笑顔でにつこりした。

「こんどはどうです。ちやんと一杯あるでせう。」

　三吉は、かうまでしても、酒が飲みたいものかと、近寄つた顏をつくづく眺めた。酒のせいで枯れきつた皮膚がいくらかつやを含んで來た。

「うん。すぐコップの冷たさでわかるんぢや。」

　父は、見えない目をぱちつかせて、舌の上で味はふやうにした。ちやんと兩手でもつたコップは膝の上に置いてゐた。母がずつと前に、疊の上に置いたコップを横合から飲んだために、それに懲

りて父はかうしてコップを手離さなかつた。それが奈何にも小さい猜疑らしく寧ろおかしかつた。

「先刻、横山のおばさんが見えられてな。ご厄介になつた。」

　父は、機嫌のよいのと、心愉しげになつたお辨茶羅とから慥ういふと、また、コップを口のところへ持つて行つた。ゆつくりと話しながら樂しむやうにぢみに見えた。

「あ、さう。」

　三吉は、これだけ言ふと、ひとりで何氣なく微笑んだ。

　どういふものか、横山のおばさんが來ると機嫌もよかつたし、元氣になるやうな父だつたのである。三吉には、それが、その根ざしてゐるところが、おぼろげにわかつてゐるやうな氣もちがしたからであつた。

「あのおばさんは、よく氣のつく人ですね。それに達者だし何時も渝らないで來てくれるし…。」

　三吉は、川添ひの、對岸を見晴らした二階で、四五人のお針子と仕ごとをしてゐるおばさんを考へ出した。まだ、からだに、ほんのりと中老の溫かさと厚みが殘つてゐるやうなおばさんだつた。

　父は、酒をしまふと、こんどは、すこし横にして呉れるやうに言つて、横になると、すやすやと

睡つた。それが譯もなく横にさへなれば睡つてしまへるやうな、シンの疲れが行き亙つてゐるらしく思はれた。

三吉は、うす暗い部屋にながい間坐つてゐた。骨と皮と、それにつながる呼吸が、なまぬるく通つてゐて、生きてゐるといふことが判然と感じられなかつた。それは別なものが、人間でないものが、むんずりと横臥してゐるだけで、そのものに、意志も生活力もないもののやうに思へた。

三吉は、立つて、小耳を突き立てて、父の寢息をうかがうた。その呼吸や肉體から岐れて出て來た自分だとはどうしても思へなかつた。おれの呼吸と、この人の呼吸とが、いつか繋がつてゐたことがあるのだ。わかれ出た呼吸がかうして殘つて行つて、一つは、だんだん稀薄になりしまひには絶えてしまふのだと、さう思つても、やはり、こゝに衰弱しきつてゐる生きものは、おれとは別々なものだと、かれは考へ込んだ。

かれは、窪んだ眼と、落ちた頬と、そして全體として弛んで還らない相貌を見詰めてゐるうち、ふしぎに、自分に似てゐるものが、この死生を逍ふてゐるもののなかに漂ふてゐるのを認めた。それは、どうしても取消すことのできない錯雜した表情ではなくて、たゞ、ぼんやりした、取とめのない、氣のつかないやうな目や鼻のあたりに、三吉自身の顏容がそつと古い寫眞のやうに何時の間にか映り殘つて居るのを見たとき、かれは、なほふしぎさうな目つきでまじまじと、その瞳を父のなまあたたかい顏に近寄せた。そして、永い間眺め込んだ。眺め込むほど、或る不思議な觀念が、かれを捉へた。

これが自分と分れて行つた表情だ。自分を永く生殘して行つた原子だ。そして自分はこれをこのまゝ受け繼いで更に次ぎへこのものを引き伸ばし、生みつけてゆくのだと思ふと、かれは息窒まるやうな氣がした。初めて生れた自分の子供の顏に似てゐるよりも、もつと不思議な驚きを感じられた握つても握りつくせない闇のやうなものを感じた。

「おれがかうしてゐる間にも、おれ自身が父の今あるだけの精分のちからで、父が生物としての最後の勢ひであれに噴きつけてくるものがありはしないか。對ひ合つて坐つてゐると他人同志の顏も聲も調子も似てくるといふことがあるとすれば、あれは現在のいま、かうしてゐる瞬間にもだんだん此の父の顏容が寫されてきてゐはしないか。それが次第に固定してきて居はすまいか。」

三吉は、そのとき、ふとした氣から、小指をぴいとん刎ねて、そつと父の頬をその爪のさきで靜

かに突ついてみた。たるんだ皮膚は寧ろうつすりと冷たいくらゐで、ぴりとも顫はなかつた。かれは、もう一度それをこころみた。それは先刻より、ややちからが餘計に籠められてゐたせいで、皮膚がやや震へ、眼の下の肉の窪みがちよいとひりついた。同時に眉毛もその震へをつたへた。が、父は、そのために目をさますやうなことがなかつた。かれはさうしてゐるうちにも不思議な苛立たしい、やゝ殘酷なものを弄ぶやうな、ひよんな氣がしてきてならなかつた。それは殆ど抵抗することのできないものに對する齒痒さと、それ自身に感じる不自然な憤怒と、も一つは、どれだけまでに父が父としての生物の餘勢を保ち得るかといふことを試みたい爲であつた。

かれは、さういふ不德な心持ちを持つてゐることを、もう、その人差指を更に、先刻よりもちからを籠めて父の頬の上にそつと突きおろすときにさへ充分に感じてゐたのであるが、それよりも、最うその苛立たしげな氣もちの方が先立つて了つたのであつた。かれが、さう父の頬の上を突いたときに、父は、からだの何處からか聲がしたやうな氣がして

「む、む。」

さういひながら、やつと、うつすりと目をさましたらしかつた。

盲ひてゐる父は、目をさましたとて、三吉がそこに顏をさしつけてゐようとは思へなかつた。

三吉は、そのとき父が目をさましたことを、自分自身の健康を内感するやうにうれしかつた。まだ感覺が生きうごいてゐることを快く感じたのだつた。が、かれは、やはり默つて父の顏を見下ろしてゐた。蒼白い、ちからない顏は仰向きになつたまま、白眼だけがすこし動いたのと、口をもがもがさせるだけであつた。あとは、やはりぐつと動かなかつた。

「やはりかうしてずるずるに、さめたり眠つたりしながら生きてゐられるのだ。それが毎日つづくやうに、どれだけ續いてゆくかもしれない。」

三吉は、父のそばを靜かにはなれた。拔足をしながら、その上、さとられまいと氣を焦つて、うす暗い臥床をはなれやうとして、二三歩あるき出した。

そのとき、父は、盲目者にありがちな敏深い聽をはたらかした。すくなくとも、三吉が今まで坐つてゐたといふ實在が、むしろ、超聽覺的な氣もちで、何氣なく、そこに誰かがゐたやうな氣がしたもののやうに思へた。ただ、單にそれだけのことが、父をさました。

「誰か。三吉か。」

父は、あはてないでさう聲をかけた。ひと眠りしてゐるうちに十年も經つたやうな、さきとは別な世界の物音をさぐるやうな父のぱちぱち遣る目つきが、三吉の、足もとを掠めた。三吉は、足もとを搔き蹴られたやうな氣になつて、惶て、答へた。

「三吉です。さつきからあなたのそばに居たんです。」

三吉は、正直にさう言つて、もしも、ずつと先刻から知つてゐはしなかつたかとさへ、考へた。が、すぐその氣もちは消された。

「さうか、おさとは?。」

「お母さんですか。まだ、外からかへつて來ませんよ。」

かれは、ときをり父がほとんど何氣なく、さういふ寂しい問をするごとに、やはり、父が自分で氣のつかないところに、母をたよつてゐるやうなところがあるのを、むづかゆく感じてゐた。が、それも三吉には悪い氣を起させなかつた。

「さうか。」

父はそれきり何も言はなかつた。いつも、氣長になつて父のそばにゐない母を忌々しく感じたが派手ずきな母の性として、こんなうす暗い部屋にゐるより、「外遊びしてゐる方がよかつたらしかつた。

三吉は、父のそばを離れると、母が近所にゐないかと捜しに出掛けようとしたが、かれは一たん穿きかけた下駄を脱いだ。日がうすれて夕方近かつた。

三

その人達はみなどうしたのか、やつぱり此の煙のうちに這入つて行つたのだらうと思ふと、自分もやはりいつの間にか死んでしまつて、かうしてとほとほ歩いてゐるのだらうと考へた。が、死んだ自分がかうして物を考へたり煙が見えたりするわけがない。まだ死なないでゐる。これは夢にちがひないと思つても、ふしぎなことには、煙のただようたなかから、ほい、ほい、と籠かきの息杖の音がしてくることだつた。なんだか皓々と鳴りわたる松並木の遠くからでもくるやうな掛聲だつた。

籠は、いくつも、その蒼くながれた煙のなかをはつきりと走つてゐた。毛脛や、紺のへり取りの垂簾も、かごやの頭の髮も、息杖の打ち方も皆むかしの通りだつた。ほう、ほい、ほう、ほい、と掛け聲をそろへて、右足が前へ走ると、左足がうしろへくの字なりに曲つてゐた。ばつた駕屋のそれとすこしも違はなかつた。ただ、駕のむかふの煙に透いた簾のなかから人影がしてゐたが、なかに坐つてゐるのは誰だかが茫乎として解らなかつた。黑ずんで坐つたままの姿が吊紐にすがつてゐた。よほど、遠くから來たものか、みんな、へとへとに草臥れきつて吊紐にすがつてゐる蒼白い頸が、駕のゆれるごとに瓢簞のやうにふらふらしてゐた。そのたびに蒼褪めた横顔がちらりと見えたがやはり、誰かに似てゐるやうで、どうも思ひ出せない顔容であつた。

その駕は二つも三つも續いてゆくと、煙がゆれて渦巻いて、駕のあとに水脈のやうなものを長くひいてゐた。いまごろ何のために、ああいふ駕屋が走るのか、誰かがゐたら尋ねようとしたが、誰も知りびとらしい者がそこらにゐなかつた。ただ、一面に煙つぽい灰色と青みある陰影とが交り亂れてゐるばかりだつた。

氣のせいか、駕のなかの人影はうつすりしてゐたけれど、みな誰かに似て一度會つたことのあるやうな顔つきだつた。走つてゐるやうで、實は停つてゐるやうなところもあつた。だんだん煙になれてくると、ふしぎにも、煙のうすいところに、氣の遠くなるやうな空の高みに、美しい線をひいた富士山がすういと伸びあがつて、扇形に頂きがぎざぎざになり又すうと一すぢの線をひいてゐた。ははん、あれは富士山だ。まだ一度もみたことのない富士山がかうして見られるのは何よりだと、その繪にあるやうな聳立を、ひつそりした雲と煙の間から眺めた。

雪があるかないかも判らなかつた。たゞ、一面の煙のなかゝらその頭だけが見えるのだつた。外に何もない。ほい、ほう、ほい、ほう、とやはり駕屋が豆粒ほど小さくなつて、こまかく動いて走つてゐる。ふと、おさとは、どうしたらうと考へた。おさとを考へると恐ろしい氣がした。さつき聲がしたが最うゐなくなつたのだらうか。それとも死んで、この煙のなかを走つてくるのではあるまいか。おさとに會ひたくない。追ひつかれると面倒だと考へると、うしろから氣のせいか、おさとらしい足音がしてくるやうな氣もした。れいの尖つた酢走つた聲音も雜つてきこえてくるのだつた。

「あの聲はおさとだ。どうしておれが此處を歩いてゐることを知つてゐるだらう。」

何處まで行つても煙つてゐた。手に摑めさうな濃い厚みのある煙であつた。かれは、そこをやたらに走つて行つた。駕屋のかけ聲も既うしなくなつてゐた。もちろん、もう一度みたいと思つた富士山もいつのまにか見えなくなつてゐた。いつたい、此處はどこまで行けるのだらうかと、むやみに歩いて行つた。足腰のたたない自分が、しかも何も彼も、見えて歩けるのが不思議な氣がした。その上、からだが愉快にかるかると健康に返つてゐた。よく、おさとから苛められて眠るのだけが樂しみだつたことが思ひ出された。が、そのとき、かれは、ぎくりとした。厭な厭な聲がした。「四年越しに病つて——。」さういふ聲がした。幾百度きいたか知れないおさとの諄い厭な聲だつた。その聲がうしろからひびいた。

かれは、ふいにふりかへつた。と、そのとき、おさとがあとを趁つてくるのが、だんだんにネヂを廻して大きく見る虫目金のやうに大きくうつつてきた。刻々に、大きく、ぐるぐる廻つてゐた。

かれは、うしろを振り顧へると、おさとの背後に群をなした痩鴉が一杯にむれて、かあ、あ、かあ、と鳴聲をあげて、啼き叫んでゐるのを聞くと、おさとまでがその一羽の大鴉のやうな氣がして身ぶるひを感じた。わけても黝ずんだ着衣が、なほ、それらの群鴉に似てゐた。

「あれは、まるで鴉のやうな女だ。ここではもう鴉になつたのかもしれない。」

かれは、また走り出した。すこしでも追ひつかれないやうに、できるだけ駈け足になつて急いだが、だんだん、疲れが重なつて、息さへ切れてきた。

「どこまでお前は趁つてくる氣だ。此麼遠いところまで。」

かれは、ぐつたり疲れてやつとこれだけを言ふと、又しても脊中がきふに重くなつたやうな氣がした。どうしても、あれはおれを趁つてくる……さう考へると、きふに、足が動かなくなつた。きふに、錘を食ッつけられたやうになつた。

おさとは、せせら冷笑つて、白い歯を反らせながら近づいた、そして何かいはうとしたが、かれは恐ろしくなつて震へた。物をいはうとしても口が動かなかつた。

「おれは一人でゆきたいのだ。お前とはべつ〳〵にゆきたいのだ。」

さう言つても、にたにた冷笑つてゐる凄愴なおさとは、わざと默つて立停つたきりで返事をしなかつた。爲方がないので、かれは、さつさと歩き出した。おさとも同じいやうに歩き出した。ふりかへると、やはり立停つて白々しく冷笑つて歯がしらを刄物のやうにぎら〳〵光らしてゐた。かれ

は弱り切つて、いつそ一緒に歩かうかと考へ出したが、やはり一人で歩くことにした。おさとは、どこまでも蹤いてきた。その足音をきくだけでも、心は重りかゝつて悩ましげに打震へた。もう何も樂しみはなかつた。かれは溜息を吐きながら、腰をかがめ、足を摺り、その上、一歩ごとに追ひ詰められてゐた。

「おい。」

さう振りかへつても、向ふでは故意と近寄らないで、遠吼えするやうに笑つてゐた。もう仕方がないので、はらはらして、眩暈がしさうでふらふらした。そこは草場も石魂もなかつたために、その上、地べたがやはり雲のやうに柔らかくふわふわしてゐたので、腰でもおろして憩まうものならそれきり、ずり墜ちさふで危なくてしかたがなかつた。

「いつたいおさとは何處まで跟いてくる氣なんだらう。あ、厭だ。」

かれは、さう腹のなかで溜息と一緒につぶやきながら仕方なしにとぼとぼと歩き出した。そのときおぼろ氣にほう、ほい、ほう、ほいと先刻の駕屋のこゑが、ずつと煙のなかから遠くで起つてゐた。まだ駕屋が通つてゐる。あれに近づきさへすれば、おさとと離れられるにちがいない、さう思つて聲のする方へいそいだ、急げは急ぐほど疲れた。ほう、ほい、と聲はきれぎれに起つてゐた。かれはそのときはじめて駕のなかに乘つて居ればおさとに逢ふ氣つかひがないのだと考へた。そして駕屋をめがけて走り出した……。

駕屋にさへ追ひつけばいいやうな氣がして、かれは矢鱈にはしりつづけた。

「何處までも尾いて行つてやるから何處までも……。」

振かへると、おさとは、もう胡桃のやうに黑ずんで、齒ばかり光らせてゐた。手も足も榾のやうな骨ばつたやうなものになつて見えた。はつと氣がつくと、しつかりと、帶のところを掴んでゐるらしく胸もとが苦しくなつて絞められさうだつた。からだをヒネつても帶は依然として黑々したおさとの兩手につかまれてゐた。それが針金か何かで縛られたやうに手强かつた。

「苦しく仕方がない。引張はつてはいけない。」

「…………」

かれは、さう拜むやうに言つても、れいの啞のやうになつたおさとは、ただ、冷笑つてゐるだけで離さなかつた。そのうち胴のところがすつかり括られて、もう少しも動けなくなつた。かれは、

執拗で凝りあがつたやうな妻をはじめて、これまでにない恐ろしい怪物か何かのやうにじろじろ眺めた。實際、黒ずんだ影は、かつきりと煤のやうに長く地上に曳かれてゐた。

「お前はまだわしに苦勞をかける氣か、わしは、もうお前の好きなやうに苛められてきたのに、まだお前はさうやつて執念深くわしに附き纏ふのか。お前はわしの命まで掠める氣か。」

かれは、腹のそこから出たやうな聲を出して、鷄の首のやうに長いおさとの頸すぢをながめた。おさとは冷笑ひをつゞけた。その聲がひびくもののない筈のあたりに、棘立つて鋭くひびいた。かれは身ぶるひを總身にかんじた。

「あゝ。」

かれは又た溜息をついた。おさとは、はんたいに、げらげら笑ひつづけた。齒糞の匂ひまでしてきた。

「何處までくる氣なんだ。さうやつて默つて立つてゐては分らない。」

そのとき、おさとは、ちよいと唇をうごかしたが、何を言つたのかかれの方へきこえなかつた。何を言つたのだらうと、かれは聞き耳をつッ立てた。そのとき、かれは、ぼんやり目がさめかかつたうつらうつらとその續きが長い間つき迷つてゐた。うす青いけむりの立ちこめたあたりに、かれの夢が漂ひつづけてゐた。

ぼんやり電燈がついて、そのしたに三吉が書物をよんでゐた。が、父は誰がゐるのか分らなかつた。ただ、やはり煙のやうなものにつつまれてゐるやうな氣がした。それ故、目がさめても、實際はやはりさッきの駕屋も富士山も、どこか、そこらに見えさうな氣がしてしかたがなかつた。父は夜具をつかんで見た。手ごたへがあつた。そして初めて聲を立てた。

「そこに誰か居るのかい。」

三吉は、書物から目を放した。そして父が目をさましたことに氣がついた。

「ゐますよ。僕だけです。先刻からずつとゐるんです。」

「さうか、あかしが來たかい。」

「電燈ですか。來ましたよ。食事にしませうか。」

「うん。」

暫らくして、三吉は、食事の用意のものを運んだ、そつと父を起すと、いつものやうにきちんと

坐つた。さうするごとに、三吉は、父のからだの骨がどこか一ヶ所でも外れはしなかつたかと思ふほどごつごつするのに悩まされたのである。

「お母さんは――。」

三吉は、うすぐらゐ聲でこたへた。一種の氣羅りがすぐして來た。

「ちよつと出かけたらしいんです。ちよつと先刻です。」

「さうか。」

それきり父は何もいはなかつた。

三吉は、何時もするやうに、小鳥か何かに物を食べさせるやうに、箸のさきに、お茶だのご飯だのを抓んで、ひとつ口づつ、父の口もとへ送りこむのだつた。さうするごとに、父は老人らしい乾いた唇をさし出した。三吉は、そんなとき、荒い自分の性格にも、かういふ風に父に親しむことのできるのを、かなり、しみじみと心に沁みて食べさせることができた。

「もつと口を開けなさい。もうすこし大きく――。」

三吉は、箸をつまんで、父にかう注文した。

「これでいいかい。」

父は大きく口をあけた。三吉は悲しさうに微笑んだ。

「え、それでいいんです。」

父は、一口食べ終へると、そこへ、お茶を一口だけ飲んだ。そのあとで、もう父はれいの小鳥のやうな口をだして、つぎにくる箸のさきのものを待つてゐた。

三吉は、心のなかで、年はとりたくないものだといふ觀念と、自分と父とが、こんな寂しい繋がりを父の幾干もない餘命に結びつけられてゐるのを、幾度となく一人で悲しさうに微笑んでみたりした。

次から次へと移りかはる人間と人間の寂しいつながりが、深くかれの心にきざみ込まれた。

そのとき父は、もう、すつかり先刻の夢をわすれてゐたばかりでなく、その一つの場面をも思ひ出さないでゐた。意識と考察の世界が次第に稀薄になつて行く父は、たゞ、いま恁うして食事をなしてゐるのが生活のすべてであるらしかつた。さつきの世界は、それが實際、夢をみたのかどうかさへ、考へ浮かばないでゐた。

「もう澤山。」

父は、しづかに頭を振つた。そして口を閉ぢて見せた。

「も少しどうです。おいしいものが未だ殘つてゐますから。」

さう云つても頭を振つた。たるんだ皮膚にも食ひ足りた張り工合が、からだの奥から充ちて來てゐるやうだつた。

「いや最う澤山。」

三吉は、箸を置いて、また、お茶をついでその手にもたせた。父は、それをしづかに舐めるやうにして味はつた。おいしさうな茶を啜る音が、さわやかな匂ひをふくんで流れた。

「では暫らくお休みなさい。からだが息まりますから。」

さういふと、三吉は、父のからだを横臥させた。その上から夜具をかけた。それでいゝありがたうと父は言つて、からだを縮めて休まうとした。蟲か何かのやうに縮めたからだが、節ばかり多い骨立たしげなものに見えた。

三吉は、電燈のしたへもどると、また、胡坐を搔いた。親といふものゝ不思議な寂しいつながりと、それをわけなく憫れむ氣とが、ぞく〳〵とあたりに逼つてゐた。生きものゝ、しかも肉親のけはひは三吉の心をしづかに取卷いて、さま〴〵なことを考へさせた。

「ふしぎな生きものだ。おれがかうして坐つてゐると、なほそれがハッキリ感じられる。」

三吉は、も一度、父の方をみた。しづかな呼吸づかひが、三吉の耳もとに聞えた。弱いたよりない息づかひだつた。が、それが根のないものゝやうに危ない氣持ちでも聽きとれた。

四

三吉が外からかへつてくると、父のそばに、横山のおばさんが坐つて、しづかにお茶を喫ませてゐた。おばさんの黑繻子の帶が品よくうつゝて、じみにくすんだ光をみせてゐた。

「あ、おばさん、よく來てくれましたね。いつも濟みません。」

三吉は目禮をした。おばさんは居ずまひをなほした。そしてよくする鳥渡微笑ひをうかべた。おばさんさういふ微笑は、柔らかくて、つみがなくて、さつぱり洗はれたやうなところがあつた。

「いゝえ、いつも御用にも立たないで却つてお邪魔かもしれませんよ。」
父は、横合からいつも嬉しいときにするやうに、二三寸ゐざり出た。
「さツきから誰もゐないんで困つてゐたところだつたのだ。そこへ恰度來て下すつたので助かつた。」
さういふと、父は、やや遠慮するやうに目を瞬かせた。おばさんは、こころよい肥りと小綺麗なまだ張りのある皮膚を、三吉の眼にとまらせた。おつとりした目が、やはり一番柔しかつた。しづかに湛へられて、ながれこんでくるやうだつた。
「僕の居ないときでもあなたが來てくださるんで、本統に助かりますよ。年寄りは寂しがりますしね。それに宜く僕が外出をするもんですから。」
三吉は、父と、おばさんとを交る交る見つめた。まだ父が寺の方にゐたとき、よく、みくじを下ろしに來たり、花物を持つてきたりする當り前の參詣人だつたが、いつの間にか寺へ出入するやうになつてゐた。十四年前に夫に別れてから一人暮しをしてきたおばさんは、まだ四十代の容色をとゞめてゐた。派手好きで、若かつた。

「どれだけでもお世話はしないんですよ。お母さんもゐらつしやることだし、出しやばるのもなんですから。」
そこまで言ふと、おばさんは鳥渡言葉をきらせた。そのとき三吉も、ひよいと何かに引つかゝつたやうな氣がした。けれども直ぐ三吉は、ことばを續けた。
「母のことは遊んで歩いてりやいゝんですよ。言ふだけこちらが野暮ですから。默つてあゝして置いた方がいゝんです。」
三吉は、穏かにさういふと、おばさんの顔をながめた。
おばさんは、母のことになると、決つて眉根を顰めた上、きつとしてすこし烈しい調子になつた。
「何の氣になつてゐらつしやるんでせう。ついぞ家にゐたことがないぢやありませんか。何時來たつてお留守なんですもの、お可哀想にお一人だけおいてけ堀にしてゐるんですもの。」
三吉は、おばさんの言ふことも解つてゐるやうな氣がしてゐたが近所を朝からたづね廻つて、どの家でも煩さがられてゐるせゐに、本人はちつとも知らないで、いゝ氣になつてゐる母をも哀れむ

やうな氣になつてゐた。

「さう、お母さんにも仕方がありませんね。あゝして置くより外にどうすることもできませんしね僕なぞが何を言つても聞く母ぢやなし……。」

三吉は、かういふと吻と溜息をした。

ちやうど父の二十五六のころに嫁入つてきた母親は、すきなだけ贅澤をして、芝居ばかり見て歩いて、役者まで二階へあげてゐた。晩おそく、どやどやと役者をつれ込んで、正體もなく飲みつづけた母であつたばかりでなく、それに尠からぬ金さへ費つてゐた。父は、そのころから何一つ小言らしいことをいはなかつた。父さへ默つて居れば、家のなかが圓くなつて行つた。それゆゑ、たいがいのことは默つて、咎立てなぞ、ついぞしたことがなかつた。

「呼んでも誰もゐないと不自由で仕方がないしな。」

そのとき父は、いくらか心の許せるせいか、ほつりと左うあまへるやうに言つた。

「さうですとも、あなたでもせいぜい居ておあげなさいましよ。あまり外へなぞ出あるきなさらないでね。」

おばさんは戯談まじりにさう言いて微笑んでみせた。

「えゝ、そりやなるべく傍にゐるやうにしてゐるんです。が、つい居ないときに父さんの方に用事があつたりするものですから。」

三吉は、頭を掻きながらちよいと赧らんだ。家にばかりゐると、やはり陰氣になるのでつい外へ出たりした。その度に、妙に三吉、三吉といふ父の、皺枯れた聲がしてならなかつた。氣のせいもあるが街でも、友人の家にゐても、暗いさういふ聲がしてきたりした。

おばさんは、よく父の不淨のものまで取つたりした。三吉は惶てゝ自分でそれをしようとすると「男のするとぢやありませんよ。」と言つて、いくらか耻かしさうにする父をてきぱきした言葉で遠慮しない方がいゝと言つて始末をした。

父は、さういふとき、すまないといつて、やはり耻かしがつた。

「あたしだつて夫が床についてから能くしてあげたものですよ。三年ばかり寢てゐらしつたものだから最うすつかり上手になつてしまひましたよ。」

さう快よげに言つて、れいの、やさしい目で、三吉と、鼻の隆い父の顔を見くらべた。年のせい

で二重瞼が深くえぐり拔いたやうになつて、それが却つてくつきりと瞳をいきいきさせてゐた。
「やつぱり氣がひけてな。つい遠慮してしまふんですよ。」
父は、突然にさう言ふと、三吉獨りで微笑んだ。
「まあ。」
おばさんは仰山にさういふと、おかしさうに微笑ひ出した。
「まだ恥かしいんですか。」
父は、わらつて、ちいと言葉を途切らせた。が、すぐ
「いや、さういふ譯ではない。」
さう言ひ出して、妙にもぢもぢした。
三人は、又一としきり笑ひ出した。その笑ひ聲のなかにも、まだどこかに引いてゐる女らしい生の艶めかしさの地聲が、おばさんの聲音にふくまれてゐて、しんとした響をふくんでゐた。
そこへ、母が表からかへつて來た。戸の開け方ですぐ分つた。
座敷へはいると、すぐ三人を見くらべた、そこに、横山のおばさんのゐるのが、あきらかに不機嫌にならせたらしかつた。ちらと見たが、すぐ外らせた。が、口へは出さなかつた。
「いつもお世話を燒かせまして濟みません。いつも駈け違つて——。」
おばさんは、靜かに落着いて、いくらか皮肉らしい口調で答へた。
「なんだかお留守にばかり上つてゐるやうな氣がしてならないんですよ。ついお氣の毒なものですから。」
「いゝえ、そんなことは何でもないんですよ。本統に濟みません。」
母は、平氣でさういふと、そこへ茶盆をもち出した。
「何しろ永い間のことですからね。さうさう手がとゞきかねますしね。」
おばさんは、聞く氣のないやうにしてゐた。

五

しまひにおばさんはかう言つて微笑んでみせた。

「なるべくよくしておあげなさいましよ。お年寄つてものは本統にさびしいんですから、あなたも床についてごらんなさい、きつとさう感じますから。」

母は、その笑ひにまぎらせたやうなおばさんの顔をちらりと小憎らしさうに眺めた。この人は何かあてつけてゐるんだとも考へ併せた。それ故、母は、性短にいくらか震への交つた聲に變つてゐた。

「あたしとしてはできるだけのことをしてゐるんですが、それも足りないつて言ふなら仕方がありませんよ。何しろ四年越しにかうして臥たきりでゐらつしやるんですからね。」

おばさんは、その四年越しが氣になつて、むしろ可笑しかつた。これまでどれだけ聞いたか知れなかつた。何か一つ鋭いことを言つて抉つて遣りたかつた。

「四年が十年でも仕方がありませんよ。それだけの運なんでございますから。」

母は、さう高びしやに出られると、なほ、かつとしてゐるらしかつた。三吉は、母の額が苛々しくなつてゐるのをそつと偸み見た。おばさんも、いい加減に止めてくれるといいが、さうでないとすぐ尻が父の方へ行くのだ。あとで困るものは、三吉でもおばさんでもなかつた。父だけがいつもいびりつけられた。

「十年なんて運はあたしや眞平ですね。そんなにされちや此方が參つてしまひますよ、わづか一二年でもうんざりしてしまひましたからね。」

母は、わざと冷たく落着いて澄し返つて言つて退けた。が、おばさんは、勝味になつてゐるのですぐ斬りこんで言つた。

「でも運なら仕方がないぢやありませんか。どうにもならないことだから。」

「…………。」

母は、默り込んで苛ついてゐた。が、そのとき突然言ひ出した。

「さうして病人の面倒をみてくださることも運でしやうかね。いつも來ていただくことなぞもね。」

母は、一時に抉り立てるやうに言つて、うつすりと冷笑ひをうかべた。見えるか見えないかの冷笑ひだつたのが、なほ、おばさんを焦々させた。

おばさんは、なるべく自分でこんどは自分の心をおさへるやうに言つた。

「さう諷刺けなさらなくともよござんすよ。まア運とでも思つてゐらつしやいましな。あたしは唯病人がお氣の毒なものですから偲うしてやつてくるだけなんでざざいますよ。變にお考へになつてはこまりますからね。」

母は、依然と鼻さきで冷笑つてゐた。が、おばさんにわざと對ひ合ふな位置に膝をずらせた。もうすつかり聲音が變つて、震えをきざんでゐた。

「ではあたしが病人に不自由をさせてをくとでもお言ひになるんですか。いえ、さうお仰るんでせう。それなら一番早いことは當の病人にきいてみる方が早わかりでございますからね。」

母は、さう言ふと、きふに父の方に顔を向けた。父は小さくなつてゐた。三吉が、何氣なく見てゐると、父は、膝の上に組んだ兩手を凝乎とおさへおさへしながら震はせてゐた。三吉は、はらはらした父の顔にはあきらかに恐ろしさうな色がうかんで、それが默つてゐるだけなほ激しくあらはれてゐた。

母は、すぐ父に食つてかかつた。

「あたしやあなたをそんなに不自由にさせましたか。さあ、それを明瞭と言つて下さい。外のことと違つて人樣にそんな風に考へられちや全くあたしや立つせいがないんだから。」

父は、おろおろしながら、何か言はうとして、あまりの恐ろしさにすぐに聲が出ないやうだつた顔をすこしづつ動かしながら、物言へないやうにしてゐた。

おばさんは、割り込んで、これも何時の間にか震えた聲になつてゐた。

「さうお父さんにつけつけ言はなくともいいでせう。べつに御不自由にさせたとあたしは言ひはしなかつたんですから。さう取られると困りますよ。」

母はきかなかつた。頭をふつて、聲を尖らせた。

「いいえ、あたしは是非とも聞いてみないと氣がすまないんでございますから、」さういふと、又父の方に向いた。父は、母の聲が近附いたので、慌てた。

「それをあなたの口から判然とあかしを立てて下さらなきや、あたしがどんなに看護してゐるかといふことを證據立てて下さらなきや困りますよ。どうしてさう默つてゐらしやるんです。」

母は、なほ激しい焦燥に喉を乾かしながら、昂奮で、もつれ勝ちながつがつした聲で叫び出した。

「毎日他人のできないやうな看護をしてゐて、さうさう苦情をつけられて耐るもんですか。不自由ならさうとはつきり言つて下さい。あたしやちやんと心算があるんだから。」

父は、どう言つていいか分らなかつた。唯、口をもくもく動かしながら、見えない目をまたたいて、唯かが何とか言つてくれればよいと待ち構へてゐるやうだつた。三吉は、その蒼白い恐怖に震へた指さきを見てゐると、餘りな母を何とか言ひ徴したいと思つたが、今、それを言ひ出したら猶口汚なくなる母を知つてゐたので、これ以上、騒ぎを大きくしたくなかつたので、わざと默つてゐた。

おばさんも、もう怺へかねてゐた。何度も言ひ出さうとして唾を嚥み込んでは控へた。が、しまひには耐らなくなつて思ひ切つて言つた。

「さういふ風に病人に食つておかかりになるのが、病人には非常に毒なんですよ。何も知つてゐらつしらないのに、あなたは何で酷い人でせう。」

母は、かつとして振り向いた。そして先刻から我慢してゐたのを、一時にぶち切つたやうに喚めき立てた。

「あたしが病人に食てかゝるつて仰やるの。このあたしが……。」

「さうぢやありませんか。あんなに温和しくしてゐらつしやるのに、よくそんなに荒い言葉であること無いことを言へたものですね。」

母は、頭ぢゆうが鳴り出したやうな怒りに責め立てられて、夢中になつて口汚なく叫んだ。

「何ですと、ふん、あなたがあたしの家へ一たい何の用事があつていらつしやるんです。案内もなしにやつてきて、病人がどうのかうのつて言ふのもいい加減になさいまし。そんな暇があつたら着物の一枚も縫つたらいいでせう。」

おばさんは、これも青くなつて、からだを顫はせた。そして餘りに激しく怒つてゐるので、きふに言葉も出ないらしかつた。心臓の方がさきに鳴り出した。

「よくそんな口を利けるものだ、一日ぢゆう、そこらを遊び廻つてゐて第一、いつ病人の世話をなすつたとがあるんです。お禮こそ言つていいのに、人が世話をすりやいい氣になつてさ。」

おばさんは、かう言ふと母をかへり見た。

母は、鼻さきで冷笑つて、ぱたりと音冴えをさせて煙管を投げ出した。その音は、父をひやりと

させた。父は、びくと吃驚して身體を動かした。三吉も、思はずはつとした。

「どうしようとあたしの夫なんだからお關ひ下さらなくともようござんすよ。あなたのぢやないんですから。」

母は、とどめを刺したやうに、かう言ひ流すと、つんと顔を眞正面に立てなほした。

「然うですか。夫なら夫らしくしてお上げなさつたらいいでせう。女らしくもない酒なんぞ飲んだりして。」

おばさんは、怒つて、もうこんな沒分漢に物をいふものかと、立ちかけてゐた。そして下を見下しながら言つた。

「あたしは最う來はしませんから、切角お大切にしてあげたらいいでせう。」

「おほきにお世話さまですこと。」

母は、外方を向いて、せせら笑つてゐた。おばさんは、立つてかへりかけた。父は、悲しさうに聲のする方へ顔を向けたが、何にも言はなかつた。三吉は、見送りするに立つた。

「もつと落ちついて寢ざめのいい看護をしてお上げなさいましよ。」

おばさんは、何時の間にか眞赤な頰をして、最後にさう毒づいた。母も默つてはゐなかつた。唾を含んだ聲音で答へた。

「下駄が外へ向いてゐますからね。まつすぐおかへりなさいましだ。そこらは危なうございますからね。」

三吉は、さう云ふ母を手で止めようとしたが、母は、すぐお前が何がわかるといふやうな目つきをした。おばさんも、何か憎まれ口を叩かうとしたが、ちよつと思ひ當らなかつたので、ちよいと母を睨んだ。そして反對に父の方に向くと、柔しく囁やくやうな低い聲で言つた。

「ではお大切にね。」

「え、どうも。」

父は、悲しさうな皺深い顔をふり仰いだ。それを尻目にかけた母は齒がゆさうにちえぇと舌打ちをした。

おばさんは、裏戸の方へ出て、ほつと吐息をついた。激しい諍論がまだわなわなとおばさんの、皮膚を蒼ざめさせてゐた。

庭さきへまで送つて出た三吉は、そつとおばさんに囁いた。

「どうか怒らないで、又來てあげて下さい。父がああして寂しがつてゐるんですから。氣をわるくしないで――。」

おばさんは、やつと靜まりかけた顔を微笑ませたが、それが急にさうしたため、なほ顔容が悲しさうに見えた。

「あまり分らないことを仰るからつい大きな聲を立てたんですよ。どうか氣にかけないで下さいよ。」

「いや、却つて僕が氣の毒な氣がするんです。ほんとに又來て下さい。お父さんも待つてゐませうからね。」

おばさんは、さういふ三吉の目を、しづかに讀みこんだ。そして首肯いて見せた。

「また、見てあげますとも。あたしも寂しいんですから……。」

おばさんは、庭石づたひに裏門へかからうとしたが、三吉は、思ひかへして

「ほんとに又いらしつて下さるんですね。きつとですね。」

おばさんは、こんどは三吉の悲しさうな目いろを讀んで、微笑つてみせた。そしていつもの、靜かにしつとりした調子になつて微笑つてみせた。

「また、あの方の留守にはね。」

三吉は、やさしい目のうちに、しんとした柔かい親切さうな光をながめた。そして、おばさんは自分や父にたいして怒つてゐないことを確めることができて安心した。おばさんは善い人だ。母なぞより、ずつと優和な心をもつてゐる人だと思へた。

「どうぞ、僕もそのうちおたづねしますが……。」

三吉はさういふと、おばさんは。

「いちど入らつしやい。では、また。」

さう言つて、蔦のからんだ古い裏の脊戸口から出て行つた。三吉は、這ひ廻つてゐる蔦の柔らかい赭い新芽が、すこしづつ微風に搖れてゐるのを、靜かに眺めこんで永い本息をついた。

次王丸と縫姫

兄の次王丸の舟と、妹の縫姫との舟は、川尻ちかくなると、ふいに舟が水路をかへたため、別れなければなりませんでした。はじめ一緒に鄕里の京都へかへすと言つたのも、やはり噓だといふことが分り、次王丸は妹の舟のへさきへ手をかけやうとしましたが、奴侍は、水馴棹を次王丸の船につッかけ、すうゐると、舟を隔れさせました。

「一緒に京へかへして下さるといふ約束ではなかつたか。縫姫をかへして下され。」

さう云ふ次王丸は、奴侍のがんじやうな手でしつかり押へられた。

「ならぬ、あの姫だけは京へつれてゆくのだ。」

「そして何をするのぢや。」

「大家へ賣るのじや。」

さう云ふの縫姫の乘つてゐる奴侍と、顔を合して哄笑ひ合ひました。縫姫は、その奴侍の足にす

がり、おろおろ聲を出して、そして寂しい瞳をかがやかして哀願するのでした。
「では兄さんも一緒に京へ拉て行つて下さい。あたし一人では寂しうてなりませんから。」
奴侍は、足にかけた縫姫の手を拂ひのけながら、
「お前だちはどうしても別れなければならないのだ。お前はこの舟で京へ向ふのだ。そして次王丸は、山里の富豪の下男に賣らねばならぬ。」
さう言つて次王丸の方の、奴侍に聲をかけた。
「喃、わしだちはそれが商賣ぢやから何といふても詮かぬ。」
「さうぢや、今になつては、もうあきらめい。」
かれは、さう答へると、水掉をぐいと、川底の深みへつき立て、いつでも辷る用意をしました。
「いいえどうしても兄さまと一しよでなければなりません。」
縫姫は、次王丸へ目がけ又聲をかけました。
「兄さん、はなれてはなりませぬ。どのやうなことがあつても。」
「さうぢや。心ばかりでも隔れはせぬからの。」

そのとき奴侍は、次王丸の舟へ聲をかけました。
「出さう。潮どきだ。」
「うむ。では又會はう。」
舟は兩方で、もう、かなり隔れかけましたが、次王丸と縫姫は聲を出し合つて別れをおしんだがそれも次第にお互ひに船脚がすすめられるとすつかりその影さへも見えなくなつてしまひました。
——日暮れにちかい川の水上には、次王丸と縫姫との聲がまるで今もなほお互ひに叫ばれ合つてゐるやうに、きえぎえに漂ひながら、風の間に間にきこえてゐました。

二

次王丸の乘つた舟は、水路を山の方へとり、その山あひにはただ、暗いまでに樹が繁つてゐるほかは、春も遲い山こぶしの白い花の光つてゐる梢のかげに、つうぱいつうぱいと啼く小鳥の聲だけが、さびしくあたりにひびいてゐました。

「わしを何處へ連れて行くのぢや。」

次王丸は舟のはしに腰かけやつと詮めたしつかりした聲でさう舟者に呼びかけました。

「夜までには着くわ。おとなしくして居さつしやれ。可哀想だが商賣だから仕方がない。」

次王丸は凝乎と見つめてゐるうち、ふと考へついて

「ではおまへは人買ひか。」

「さうぢや、よう言はしやつた。それにちがひない。」

次王丸はなるべくなら妹のゐるところを知りたいと思ひわざと優溫しくして見せ、それとなく尋ねてみました。

「縫姫は京のどこへつれて行かれたか言ふて呉れ、さうなりやお前の好きにわしはされてもよい。」

奴侍は、微笑つて見せ、そして鼻のさきをつるつと撫でさすりました。

「悧巧い子ぢや、ぢやが縫姫のところは明かされぬ。成人したらたづねて見さつしやれ、又會ふときもあらうから、それを樂しみに山では働かつしやれ。」

「山とは……。」

次王丸は、いま自分のつれてゆかれるところを初めて恐ろしく感じ出したのでした。先刻からすこしも考へなかつただけ、なほ恐ろしい氣がするのでした。

「山の富豪のところぢや、そこでは子守をされるのだ。」

「子守とは！。」

「子供を遊ばせる役目だ、わしは其處で頼まれたのぢや。わしを怨ましやるな。そなたは悧巧ぢやから。」

次王丸は、それきり默つて舟のへさきへ蹈んで、だんだん昏れしづむあたりを見てゐるうち、ぼんやり縫姫のことを考へ、その姿が映し繪のやうに浮んでくるのを凝乎とこらへながら、いまは詮方なく涙ぐみ、舟のゆれるごとにはつと氣づくくらゐでした。

三

舟は、夜になつてから、灯の默いた淋しい山里の、わづか五六軒しかないところに、繋がれました。

「あの點灯のついたところへ、そなたはわしと行かねばならない。さあ陸へ上つたり――。」

次王丸はしかたなしに、山里近くへ上り、そして奴侍のうしろからすたすた歩いてゆきました。夜中になつたあたりには、晩に啼く夏近い蟲がつうゐつうゐとすだき、すぐ森の中に、大寺院の墓のやうなものが黒々と建てられ、そこの窓々から、大方、さつき舟の中で眺めたれいの佗しげな灯影が手にとるやうに見えてきました。

「あの家ぢや、そなたは何にも言ふてならぬ。わしがあそこから歸つてゆくまではの。」

「言はぬ。」

「さうか、そなたくらゐ聞きわけのよい子は稀れぢや。ものもちも喜ぶことぢやらう。」

次王丸と奴侍とは黒い門をはいるとすぐ、奥の間へ通されました。そこは一面に美しい敷物と飾り壺や刀劍類が置いてあり、一見こんな山里には珍らしい立派な家であることを、次王丸は考へました。むかし次王丸がまだ父母のゐた家と、どこか似てゐるやうな氣がしました。わけても鎧櫃やそのかたはらにある香爐なども、美しい光澤のある陶器だと感じました。

そこの上段に、富豪者である、年寄りのやうな若いもののやうな、男が座つてゐて、おほやうに奴侍を尻目にながめました。

「仰せの子守をつれてまゐりましてございます。品もありそだちも太刀筋らしうございます。」

奴侍は、平手をついて、おそるおそるさう言つたときに、ものもちの男は、ちらりと次王丸をながめました。次王丸も臆せずものもちの顔を見かへしました。兩方でするともない微笑みがとりかはされたのです。最もはじめはものもちの男がしたのではありましたけれど、

「ふん、御苦勞、して名前は？」

その男は、すぐに奴侍にさうたづねたが、奴侍はまだ知らなかつたので、きふに、物言ひたさうに、次王丸の顔を見ました、次王丸は直ぐ、自分の方で名乗らなければならないと思ひ、

「次王丸と申します。」と答へた。

「さうか、こんな山里でも辛抱をせい、そしてわしの子供の世話をしてくれぬか。たのみぢや。」

次王丸は仕方なしに、默つてうつ向き承知した旨をこたへた。

「よし。」

もものもちは、さういふと手文庫めいたものから、兩三枚の黃金をばらりと奴侍の膝がしらのとどく方へ撒き與へました。奴侍はそれをきちんと三枚手のひらに握り、立上りかへりかけました。

「そなたは濟まぬが、さつきも言ふとほり、これがわしの商賣ぢや。地獄へまで持つて行かねばならぬ、業な、その商賣ぢやから。」

奴侍は、襖のそとへ消えてしまひ、あとで次王丸はどうなることか、おちつかうとしても、心懸りになつてしかたがなかつた。

「次王丸、おまへは悧巧ぢや、死ぬといふことは、よいことか惡いことか、自分で自分を死なせることが——。」

おかしなことないふんだと、次王丸は考へたが即座にかう答へました。

「わるいことと思ひます。」

「それでよい。お前は悲しいつて死んではならない。わしの子供を明日から遊ばして呉れ。」

さういふと、手を拍ち、それが襖のそとへ聞えた時分、平奴が一人、手をついて出てきました。

「娘を呼べ。」

平奴は、すぐ外へ出てゆきました。その娘といふのは、いつたいどんな娘であらう。何んだか鬼の卿からでも撥き出た恐ろしい顏の女のやうに思はれ、今出てくるか、出てくるかと、それの姿が出てくるまでは氣が氣でなかつた。

その間にも次王丸は荐りに縫姬のことが考へられました。京へ上る舟の中で、泣きつぶれながらゐる妹のしほらしい姿が、又しても次王丸の頭に、絕えず映つては消えてゆくのでした。

「次王丸、お前はたつた一人で、奴侍につれられて來たのか。」

「いえ、妹の縫姬も一しよにつれられ、妹は京へ連れられてゆきました。私のことよりも縫のことが氣になります。」

「縫姬といふのか。」

「さうです。」

もものもちの男は考へながら、それも仕方のない事だと諦らめさせ、

「そのうち尋ねて見てやらう。お前さへよく勸めてくれれば、わしは、その縫姬をも探してやら

う、そして會はせてやつてもよい。」

「どうか逢はせて下さい。わたしのことはどうなつても關ひませんからどうか妹だけを助けてやつて下さい。」

「よし、よし。」

ものもち男は、さういふとゆつたりと煙草をくすべ初めました。しばらくすると、うしろの襖が開いて、ものもち男の娘が出て來ました。

次王丸は、まだ六つくらゐの、まるでこれは思ひがけない、小ちやいまるまるした可哀い子供だつたのには、今さら驚くやうな氣になつて見上げました。その子供は、すぐ次王丸をながめ、邪氣なささうににつこりして、その美しいつやつやした瞳を次王丸にひらいて見せました。次王丸は思はず知らず微笑ひかほになつて、自分のそばへ立つてまるで珍らしい人間を見るやうにしてゐる娘を見上げてゐました。

四

間もなく、ものもち男は、父親らしく娘を呼び、そして自分の大きい膝の上に座らせ、頭を撫でさすりながら言つた。

「お前、おじぎをしないか。この兄さんにだ。」

さう男が言ふと、娘は抱かれたまま、次王丸を眺め、ちよいと羞かしがつたが、間もなく、

「でも知らぬ方ですもの。」

「知らぬ方だからするのぢや、それに明日からお前の子守をしてくれるさうぢや、お前がほしいほしいと言つてゐたお友達ができたのぢや。」

「さう、お友達になつてくださるの。あの方は。」

「さうぢや、お前と永いお友だちになつてくれるのぢや、お前はきつとよろこぶにちがひない、どうぢや。」

「え、うれしいには嬉しいんですけれど、なんだか初めてなんですからきまりが惡いの。」

男は、可愛さうに娘のあたまを撫でては、何度も搖ぶり上げたりして、娘をあやして居ました。

「何のはづかしいことがあるものか、次王丸、これがわしの娘ぢや守をしてくれるかの。」

「いたします。」

「そら見ろ、あゝ言つてくれるではないか、聞いただらう。」

「えゝ、次王丸といふの。」

娘は、こんどは始めて次王丸の方へ向き、聲をかけました。次王丸はすぐ氣の善さゝうに返辭をしました。

「さうです、次王丸と申すのです。あなたは？。」

さう言はれると、娘はちよいと羞かみましたが、すぐその赤い唇をひらき、ひくいしかし透つたいい聲でこたへました。

「あたし、時姫。」

さう言つて、又ちよいと躊躇ひましたが程なく、

「さう言ひますの。」

次王丸は、うなづいて見せました。そのとき、男は手を叩いて次王丸と時姫とを、一ト室へだてた部屋でねむらせるやうに言ひ附けました。それほど夜は更け亘り、ほう、ほう、といふ梟の聲がくらい山里の遠くからしてきました。

次王丸の部屋は小さい、藁床のある汚ない部屋ではあつたが、時姫は、白いふわふわした寐部屋にやすみました。そして二人がべつべつの床へはいるときに、時姫は、首をかしげ、

「おやすみ、鬼に食はれませんやうに、次王丸。」

さう言つて、すうと重い戸をしめてしまひました。

「おやすみなさい。」

次王丸も、さう挨拶をして藁床の上にからだを横へました。疲れてぐたぐたになつてゐるので、からだが森として靜まりきつてゐました。

次王丸は、床についたものの、なかなか眠れませんでした。あたりに漂ふ藁の匂ひと、すぐ窓外に物憂い馬の足搔きがこんこん起つてゐたりしました。それに絶えず氣になる縫姫が、今ごろ何處にゐるだらうと考へると二人で生家へゐたころを思ひ出したりしました。

ふと氣がつくと、窓のそとにぼんやりした空明りのなかに、誰かが佇んで、ゐるやうな氣がした

ので目を据ゑて見るとそれは紛ふ方もない平奴の姿であつた。どうして今時分、しかも夜中にあんなところに佇つてゐるのだらうと思ふと、氣味がわるくて爲方がありませんでした。次王丸は、小用に立たうとすると窓の人影がすうと動いて聲をかけました。

「何か用があるのか。」

「ええ、すこし――。」

次王丸はさういふと、すぐ平奴は、次王丸を連れて厠の方へ案内してくれました。窓から氣をつけてみるとはやり立つてゐるました。

藥床へかへると、たまらなくなつて、平奴に言つたのです。

「どうしてお前はそこに一晩ぢゆう立つてゐるのです。」

すると、平奴はあたりまへだと言ふやうな顏をして、

「言ひ附けだから守つてゐるのだ。ひよつとすると、お前に遁げられでもしたら大變だと思ふからだ。」

次王丸は、かうぶしつけに言はれると、先刻から逃げ出さうと考へてゐたことがすつかり先きを見透かされてしまつたやうで、がつかりしてしまひました。どうかしたら今夜のうちに此家を飛び出さうと考へたくらんでゐたことも、今は全く甲斐のないことだと分つとしまふと、それきり藥床へもぐりこんでしまひ、

「わしは最う逃げたりなぞしないから安心するとよい。」

さう言つても、平奴は疑ひ深さうに微笑つてゐて、やはり窓さきから離れやうとしませんでした。

「いや、おれは役目で立つてゐるので、お前が遁げやうが逃げなからうが、それはどうでもよいおれはかうして守つて居ればよいのだ。」

かれは、さういふと腕組みをして、窓さきへうしろを向け佇つてゐました。次王丸は床の中で、夜中ぢうその姿におびかされうつらうつらと睡りこみました。窓からさす不思議な星かげが藥床の土間にある瀫にきらきら青白いかけを映しては、きえ現はれてゐました。

五

次王丸は翌る日から毎日、時姫と一しよになり、裏山に遊びに行かなければならなかつた。も一つ、晩には一荷の柴を刈ることがその役目でありました。

春は、まだ彼處此處の野裾や、山懐、それから雜林の奥まつたところに、影繪のやうに殘つてゐて、紫や白や黄ろい花を停めてゐました。次王丸は時姫のいふがまま、あちこちの山をあるいてゐました。が、どうしても氣がふさいでしまつて、ともすると、考へ込んで樹陰に踞んではゐました。じつと花の咲いてゐるのを見てゐるとふしぎに、花の輪廓といふものが人間の容貌に似てゐるやうで、それが縫姫の顔になつてくるのを、どうしても拂ひのけることができませんでした。

「どうしてさう考へ込んでゐるの、いつまでも。」

時姫は、優しくさういふと、いつもいつも次王丸の顔をさし覗きみるのでした。そのたびに次王丸は、

「何んでもない。」

さう答へてゐるばかりでした。ときどき、芝を刈るときにも、その刈り方をしらない次王丸に、時姫は鎌の持ち方まで教へ、そして、

「鎌をよこに使ふの、横薙ぎに切り拂ふとすぐ芝は切れてしまふんだけれど、あなそのやうだとなかなか刈れはしない。」

縱に鎌を當り前の伐り方をしてゐる次王丸に、さう時姫は言つて、先づ自分で刈つて見せたりするのでした。

「ほら切れるでせう、すッすッと、まるで夢のやうにね。」

實際、薙がれた芝は、美事にあたりにすこしづつ山をつくつては行きました。青い小さい蟲けらが透きとほつた羽をして、そこから高くへ飛んで行つたりしました。

「ほんとに夢のやうだ。」

次王丸は、さう言つて見て、自分自身の境遇もなほ夢のやうに振り顧りみられるのでした。まだ刈つたことのない芝を刈ることや、こういふ寂しい山里に居なければならないことなど、交る交る考へられてくるのでありました。

芝は、だんだん刈られると次王丸は、それを丸めて括り、木の根元にころがして置きました。ちやうど、そこの芝の刈り場から、一とすぢの明るい青みのある美しい川がながれ、貝のやうに

よく光る小石が底の方にきれいに併んで、流れてゐました。その底の小石とすれすれに、ひれの青い小さい魚が矢のやうに鋭どく走つてゐました。

「いつもどうして考へてばかり居るの。」

「わたしにはね、やはり一人の妹がゐましてね、それと別れてから氣懸かりになつて仕方がないのです。」

時姫は、すぐ眞正面になり、

「まあ、そしておいくつ位ゐにおなりになりますの。」

「あなたと同じくらゐです。私がこちらに連れられてきたときに船で縫姫は京へ賣られたのです。」

「京の何處へ。」

「何處だかわからないんです。どうして居ることか。」

次王丸は、今更らのやうに暗然としました。時姫もすぐ小娘らしく涙ぐみ、

「ではお父さんに言つてさがしてあげませう。」

さう言つて、ものもち男にその晩たのんでみましたが、れいの髭だらけの顔をした男はただ。

「よし、よし。」

と言つたきりべつに捜すといふこともしませんでした。次王丸もいまはどうすることも出來ずに毎日時姫と山へ行き、さびしいながらもそのうちにも樂しい日をつづけてゐました。

六

いつの間にか夏のなかばになり、谿川の木が涼しい綠のかげをつづり、せきれいの白いはしこい翼が何となく爽やかに見えるやうな朝、二人はよく岩の上に座つてとりとめもない話にふけつて居ました。

時姫は、熊笹を二つに折り、それで幾つも舟をつくつては、流れへ浮べ、だんだんながれてゆくのを愉しさうに見送り、そしてかう言ひました。

「この舟はきつと京へつきます。この川は京へながれてゆくのですから、きつとあなたの縫姫さ

んの手にひらはれることがあるに違ひありません。」

そして熊笹の一つ一つに、あたたかい息を吹きかけては、どんどん流してゐました。

「京へ流れてゐるのか。」

次王丸も、いまは、何んだか祈りたいやうな氣になつて、時姫のするやうな舟を熊笹でこしらへ一つ一つ息を吹きかけては流しました。そのうち一つくらゐは、縫姫の手にはいるにちがひないと考へながらゐたのでした。

二人は、さういふ毎日を送つてゐましたが、もう何百となく流しましたが、一向、妹からたよりがありませんでした。けれども時姫は飽くことなく、青い笹舟を作つては流し、流しては作つてゐました。

「こんなに作つたつて何んにもならないのだ。」

さう次王丸は、投げ出したやうに言つても、時姫はきつと勵ますやうに、自分で笹の葉を切つてきて、

「さあ、あなたも作りなさい。その中、きつと便りがありますから。」

さういふ風に言はれると、仕方なく次王丸も舟を作つてみましたが、何んだか甲斐のないことをしてゐるやうで寂しくてなりませんでした。

青い舟は毎日流され、いつの間にか、秋は雜林のあたまを朱く染め、小鳥はさびしい聲ばかりで諸方から啼いては集まりましたが、たよりは一つもなく、ただ數多い舟がながされるばかりでありました。人の話では、京のある家に、可愛らしい娘をみたといふものがあつたが、それすら信じることのできないやうな話でした。何となくその話には、縫姫に似たやうなところもありましたが、しかし矢張りわからなかつたのでした。

二人は、やはり寂しい岩の上に座り、そして舟をつくつてゐました。

この舟をひらふものは
山ざとのものもちの家をたづねよ。
次王はそこにて
縫姫といへるむすめを待つ。

山ざとには時姫といへる
おんみの友だちもあり、たづねて來よ。

次王丸は、ある朝かう書いてながしました。舟は下へ下へと、小さい波にゆられてはながれてゆきました。それが見えなくなつた時分に、時姫は、きふに次王丸を見詰めて言ひました。

「きつと便りがありますよ。きつと。」

けれども次王丸は、ただ寂しげに笑ふばかりでした。

龍紋の凧

坂の上へかゝると、わたしは乳母に、その龍紋の凧を乘りに浮かさせ、川から來る追風を待つてゐた。追風の上に、なめらかに乘り移らなければ、凧は、空へ浮んでゆかないものである。

まだ三月のなかばで、雪は、屋根や磧に一杯に殘り、山はみな砥のごとく磨かれた雪に輝いゐてたが、空は雪國特有の、深い、しかしあつさりした紺青をすこしのむらのない一色に染めあげてゐた。けれども川からくる風は荒く鋭い金屬的な寒さを刺立ててゐるため、乳母の手は、龍紋の凧べりをつかんだまゝ、眞赤に燃えてみえた。鋼のやうに平つたかつた。

『風の方向はどちらぢや、ぼんやりしてゐてはあかん。』

わたしは耳もとで渦を卷きながら鳴る風を聞いた。乳母は、あちこち凧をもつたまゝ、風乘りの隙間を窺うたが、風は、よこからも縱からも吹いてゐた。そのため乳母は諸方へ向かなければならなかつた。

『どこから吹くのか、悉目わからん。こちらか。』

『町から風が吹くかい。』

わたしは、ぐいと叱責的に、絲を、手元へひいて見せ、ばりばり乾いた龍紋の張紙をならせた。

乳母の心はあせり、あせるために猶凧向きの見當がつかなかつた。ふしぎに凧の紙裏にも風があつた。

『みな山へ向いてゐるぢやないか、西風がわからんか。』

『かうしたらよいか。』

『そこでは川へ落ちる。まつすぐに山をうしろにして待つんだ。』

『これでよいか。』

『もつと高く……』

『これでよいか。』

『もつと――石垣の上へ乘つてみい。すこしでも高いほど、よい風が通つてゐるんだから。』

『石垣へは怖くてのぼれん。』

『のぼれんちふことがあるか、どうしても登れ。』

『登れん。』

『登れつて言つたら――。』

絲をぐい／＼引き、わたしは焦立つたが、乳母は、石垣へ片足かけ、登らうとしたけれど、目の下でまだ冬のまゝ荒れた蒼い瀨なみがとうだうと音まで凄じかつた。それゆゑ、まだ若い乳母は白い足をむき出し、むき出しては震へ、石垣へ片足かけながら、それほど怖がつた。

『早う登れ。』

『恐いがね。』

『なに恐いことがあるか、足をかけろ、もつと。』

『あぶない。』

『何があぶないものか、石と石との上へ立つんだ、さう、もつと。』

『やはり立たれん。』

『あゝ下りてしまつた。も一度のぼれ、も一度。』

『厭。』

『あぶなくはない。』

『あぶない。』

わたしの頭の上の、れいの紺青の空に對岸の凧がうなつて、鷲のやうに据つて、長い、虹のやうな五色の尾をひいてゐるのでわたしは耐らなかつた。三つ四つ……それはみな朝日の光で凧肩をいからし、うなりをかけた弓鳴りをはじめてゐた。わたしは絲を怒にまかせ、グイ／＼引くため、それに引摺られて乳母はひよろついた。引きずられなければ糸が切れるからである。

『そないに引いては絲が切れてしまひますぞな。』

『切れてもかまはない。もう乳母に手つだつて貰はん。』

『一人であげられますかいな。』

『一人であげる。凧を放せ。』

わたしは無理に引いたので、凧は、地上に落ち、それが地べたをがり／＼引摺られた。その音がなほ私の心を苛立て、乳母を憎むことが深くなつた。あいつが居るから上らぬのだと、それほど憎らしかつた。

『こはれてしまひますぞ。』

『かまふな。かまふな。』

がり／＼凧紙と骨竹がでこぼこの地面の上で、爪立てて鳴り出した。ひとりで上げられないことを私は知つてゐるため、悖かしく泣きたい氣もしてゐた。はじめ石垣の上へ据ゑた、そのつぎは坂垣の人家の石段に置いてみたが、そこへそよ／＼としかないで、逸れたよいすぢのある風は、坂を下り、大橋の方へ行つたのである。わたしは苛立つほど甲斐がなく、絲をひくごとに、凧はがりがり地面に骨立たしく鳴つた。いつそ凧をへシ潰さうかと考へた。肩と肩との組竹をひとひねりして潰してしまひたかつた。が、それよりもぼんやり立つてゐる乳母の、風に吹かれ、露かれて紅くなつた顔がしやあしやあして小憎らしくてならなかつた。あゝいふところに立腐るから上らないのだ。そのくせ、わたしの凧を眺めてゐるのではない。對岸の、川越えをした見事な凧に見惚れて居くさるのだ。まるでうつとりしてゐて、なほ、業が煑えくりかへつてならなかつた。

『あつち行け。』

『どこへ。』

『あつちへ行け。』

乳母はうろ／＼してゐた。どうしていゝかわからないらしかつた。わたしは、礫を拾ろひ、それ

を乳母の眞赤にそまつた額を目がけ、狙つて見せた。

『行かんと投げるぞ。』

『どこへ行けといふの。どこへも行くところがない。』

『磧へ行け。』

乳母はなほぐづ〳〵してゐた。わたしは耐らなかつた。それゆゑ、仕方なしに投げる筈ではない礫が、指から撥き出て、乳母の、耳に打つかつた。乳母は、立つて耳をおさへた。わたしはわざとそつぽを向き、乳母の痛がる耳を見まいとしたが、わたしとしては、何故か一言でもその場合いはないで居られなかつた。へんに寂しかつた。

『あつち行けと言つとるに、行かんからだ。』

乳母は默つて、耳をおさへ私を凝視してゐた。あまりのことに氣を取られたやうに、さつきよりなほぼんやりしてしてゐるやうに見えたのである。私はだん〳〵時がたつごとに、可哀想なことをしたやうな氣が責出した。あんなにしなくともよかつた。とも考へ出したのである。ひよつとすると耳に擦れ傷でもできはしなかつたか、それにしても、耳から手を放さないのが心がかりでならなか

つた。血でも滲み出てゐはしないだらうかと、ぽつちりと梅嫌のやうな紅い珠になつた血斑まで頭で考へ出した。默つて居れば居るほど氣が氣でならないほど、寂しくなつてくるのである。しまひに私はこらへることの出來ない氣もちになつた。

『耳がいたむかい。よほど痛み出したのかい。』

乳母はしばらくしてから、もち前の明るい聲になつて、すこし柔らげた表情にうつしかはつて

『いゝえ。』

『手をはなして見い。切れてゐるかどうか見てやるから。』私は近づいたが、乳母は手をはなして見せたが、すこしばかり腫れてゐるだけで、何にも傷らしいものがなかつた。わたしはいくらか安心をした。

『何んでもない。』私は私のしたことの、たいした惡いことでなかつた事をいまさら心強く悠然とかんじ出したのである。

『家へ言ひつけるかい。耳へ礫を打つたつてな。』

『言ひはせん。』

『ほんとうか。』

『ええ。』

わかい乳母は、わたしの家へきてから、何處へも行かないで、繁といふ自分の小供を町のぬかだに屋といふ醤油屋へ時々見にゆくほかには、たいした愉しみもなかつたらしかつた。繁はわたしより一つ年上で、醤油屋の藏前でいつも働いてゐた。めつたに來なかつたが、ときどきやつてきては乳母と裏口で話してゐたりするのを私はよく見かけた。繁は、怜悧さうな目をしてゐた。さういふところは乳母には似てゐなかつた。乳母は、繁には、よく買物をしてやつたりしてゐたが、いつか祭禮のときに、乳母か私の下駄を町へ買ひにやらされかへつてくると、母へは私の分だけを買つてきたやうに見せかけ、もう一足は下駄箱の上に置き、晩、繁に屆けてやりに私をさそひ出したりした。まるで同じい下駄で、緒も山桐の目立ちまで異つてゐなかつた。なぜ然ういふことをするのだといふと、せめて下駄でも坊ちやんなみにしたいからだと言つたので、私は可哀想でならなかつただが、すぐ忘れてしまつて、私は毎日なにかの序さへあれば、乳母をイヂめなければ氣がすまなかつた。イヂめるほど、そのイヂけるのが、そのがつがつかりしたやうなところが、何となく私には特別ないい氣持ちがしたのである。乳母はどういふときでも、默り込んでしまつて、イヂめられても反抗するとか、言葉を返すとかいふことがなかつた。ただ、さうされるのが自分のつとめであるやうに溫良しく悄然けてしまふくらゐであつた。ときには、それは極めてまれにではあつたが、めそ〳〵戸棚の陰や、勝手や、庭木のかげで張り物をしながら泣くことはあつたが、さうされても別に怨めしい振りさへしなかつた。何となく然ういふとき優しく何か言葉をかけてさへやれば、すぐ元のまゝの顔になつて、れいの、明るいこゑを出すやうになるのである。

私は耳のことが氣になり出したので、凧絲を手首へ卷き、ぼつんと立ち、積に蹋んで上げてゐる凧の數を、かなり厭な氣もちでかぞへ初めた。かぞへるほど、それに交はることのできない自分がいらいらして、あたまを縛りつけた。

『既うあげなさらんかい。』

『うん。あげない。』

乳母は自分でわるいことでも爲たやうに、わたしをどういふ風に慰さめたらよいかと云ふことをれいの、ぐづりぐづり考へてゐるらしかつた。もひとつは、私がさうやつて、ぼつんと立つてゐる

のが小寂しく感じられてゐるに違ひなかつたらしく、なにか言ひ出さう出さうとつとめてゐるらしかつた。それに據つてすこしでも私の心を柔らげることができれば、それほど宜いことはないと、心で考へてゐるらしかつた。

『こんどは磧へ下りて行つて上げなさるとよい。あそこは風がよいから。』

『磧へか。』

『ええ、きつと上がりますよ。』

私はそのとき不意に乳母の顔をみたが、乳母は私の目をみないやうにして、その實影のやうにうつすりと私の顔を見つめたのが、耐らしく寂しかつた。ああ言つて置いて、私の心をいくらか和めるのだと考へると、私は私の心を見透かされたやうな氣がして、いつになく乳母の顔をながめることができなかつた。それに妙に泣きたいやうな氣持ちも雜つてゐたのである。

『僕、もう上げたくない歸へらう。乳母もかへれ。』

『どうして然うおしやるの。』

『どうしても。』わたしは、さきに立つてどんどん歩き出した。急いで歩くほど、なほ悲しげな、趁はれるやうな氣がし、そのため自分の顔を乳母に見せないやうにして、どんどん歩いて行つたのである。

『やはり歸るかね。』

『歸へる。』私はなほどんどん急ぎ足で歩き出した。腰のあたりに凧紙がばりばり鳴り、鳴るごとになほ悲しかつた。坂を下りきつてしまふと、私は耐らなくなり、含み泣きをし、家へ飛び込んだのである。

塔を建てる話

一

支那山海關から二里ばかり離れた寂しい田舍に、いつの頃からあるかわからないほど、古い、蒼みのある古城のやうな構へが、あたりに繁つた竹林の奥に、ひつそりと墓のやうに苔蒸してゐました。雨がふると、その三重の屋根甍の青い苔がいつさいに沈んだ色で一層陰氣に冴え返つて見えました。

ふしぎに、その古城の頂には、いまの時計塔のやうな四方窓のある物見があり、そこに小さく、ぽつちりと紅い色が點を打つたやうになつて見え、それが動く日と、動かない日とありました。なほよく見ると、それは美しい一人の女の子で、どういふわけで、いつもそこに坐つてゐるのか、誰もそれを知つてゐるものはありません。たゞ品のある人形のやうに、いつも蒼茫とした原野の朝と晩とをながめてゐるだけです。古城のなかに人氣があるかないかさへ分らず、たゞ、竹林のしんとした暗戰ぎと顫音よが、つぎからつぎへと累なつて、一種のさびしい風様な音を立てゝゐるのでした。

く一層もの寂しく晝の間でもあちこちの、竹林に雜つた大樹の闇から、ほう、ほう、といふ鳥のこゑがしてゐます。それが竹林に籠つて、なほ佗しくきこえるのです。

女の子は、終日何もしないで、ぼんやりさうして坐つてゐるだけで、退屈と倦怠をくり返してゐるばかりです。何かお呪ひでもしてゐるかといふと、さうではない。たゞ、坐つてゐるだけが仕ごとのやうなのです。

そこから廣茫とした原野が蕭々と、長くつらなつてゐるのが見え、朝は早くから一人の郵便脚夫が走つてゆくのと、晩になると、その郵便脚夫が疲れて山海關からかへつてくるのが見えるのでした。それが毎日のやうに繰りかへされるので、いつとはなく、女の子の目にとまつてゐたのです。一日としてそれの姿のみえないことはない。原野のはづれの村落から、黒ずんだ鴉のやうな服をきた郵便屋は、大きな鞄をかかへては、毎日、同じい足どりで走つてゆくのでした。遠くからだんだんに近くなるに從つて、その姿が、はつきりと見えてくるのでありました。

女の子は、いつとはなく、かれの姿をみると、その退屈な表情の硬ばつたうちから、すこしづゝ柔い色が、浮んできて、しまひには、女の子のもつ特有なやさしい微笑になつてゆくのでした。それは幾年ともなく、その古塔のなかにゐる間ぢゆう、かつて漏れたことのない微笑のやうでした。が、それがすぐ郵便屋の姿が見えなくなると消えてしまつて、あとは色つやのよくない、併しながら美しい肌地をもつて、ただ彌がうへに澄みに澄んだ冷たい舶來の石鹼のやうな表情にかへつてしまふばかりか、すこしの動き瞬きも起つてこないのです。たゞ端然と原野の荒た風光に向ひ合つてゐるだけで、屋根頭の鈴塔の音にも眉ひとつ動かないでゐるのでした。

そういふ春秋は、その古塔の上に、いつも來ては過ぎ去つてゆくばかりで、塔はいよ〳〵蒼く古び、苔は、窓を覆ふばかりに蒸しついてゆくのでした。そのなかに、すつと卵を切つたやうな寂しい感じのする女の子の顔が、きちんと浮いて、動かず、いたづらな燕雀のさへずりは塔下塔上にあふれてゐるのでした。

そこに人影がしたことがなく、女の子は日に三度だけちよいと姿を窓もとから消すだけで、あとは、やはり、さうやつて坐つてゐるのです、――寂しい支那の風光を見た人は知つてゐるでせうがそれが月夜にでもなると、塔はます〳〵憂鬱に煙つてゐるやうな竹林の上にそびえ、かすかに星のやうな灯がともれてゐるだけです。それが廣いあたりの原野のたゞ一つのあかりだけに、しんと、身

に沁みるやうな物悲しげな顫へるやうな色になつてみえのです。或ときは烏瓜のやうな茜みを帶びあるときは星簇の一つのやうな透明な色を輝せてゐるのでした。そのかたはらには、必ず朦朧とした女の子の影がまつはつてゐるだけで、夜のことで顔なぞ見えません。たゞ、何となく動いたり移つたりする影は、塔をなほ古く、ふしぎに、一層わびしく見せるのです。一切のものゝ煙つたり靄いだりするときは塔そのものは不思議な異國の船のやうにあやしく動いてゐるやうに思はれることです。さういふ晩、竹林全體が波のやうに動いてゐるからです。が、夜であるために、遲れてかへつてくる郵便脚夫の姿を、女の子は眺めることができませんでした。疲れて物悲しげに、塔の上をながめ〳〵して辿る脚夫は、ときには足どりを停めたりして塔の上を熟視してゐました。が、やはり影がするだけで姿はみえなかつたのです。

二

郵便脚夫は、塔の見える原野を通るごとに、毎日一つゞゝの石を抱へて、自分の家へかへつてくるのでした。

かれの家の庭さきには、幾年前からとなく、石を積みあげた塔が建てられてゐたのです。いつも物悲しげに塔の上を仰ぎ見たりしてゐたかれは、そのたびに、庭さきの塔の臺石を組み、甍を乘せ、かうして、そのまはりに竹林のやうなものを植ゑ込み、いつも立つては眺めこんでゐたのです。かれがさういふ仕事をはじめてから何年たつたかわかりません。たゞ、屋根や甍や臺石が苔錆びて、日に蒼くなつてゐたのです。ちやうど、れいの竹林の奧にあるやうな塔と同じい階上の窓にも、あをい、濕り氣を帶びた苔がからんで、それが毎日のやうに深くなつてゆくのです。郵便屋は仕事からかへると、ぼんやりと五六尺くらゐあるその塔をながめて暮すのでした。手を胸に組んで、その目をぢつと据ゑながら、ときをり悲しげな瞬きをして、人氣のない、石の白い窓をながめるのでした。かれが何のためにさういふ塔を建てたかといふことは、自分でもはつきりしなかつたのでしたが、かれの目はその塔の上に、いつも晝間ながめ〳〵通る原野の塔のことを考へさせ、その上にいつも靜座してゐる女の子のことを思ひうかべさせてくるのでした。

かれは疲れたからだを張出緣にもたらせ、塔をながめてゐるとき、いつも胸のうちで靜かな呟や

きが、ひとりでにのぼつてくるのでした。

「わたしのこの塔の上にあの姫を見ることがあるだらうか。わたしはもう塔をつくりあげた。そして今はあの一人の女の子をこゝに坐らして見たいのだ。」

「だが、さういふことは、とうてい覺束ないことだ。私はたゞひとり、この塔の上に女の子がゐるとさへ思つてゐればよい。それだけで私は私の望みを棄てなければならない。」――かれはいつもさう考へこむと、眉毛をむしられたやうな寂しい顏をして、その塔をあかず眺めるのでした。實際かれは、時にはその塔の上に小さい紅い人影をかんじることがあり、その影は晝間ながめた幻影が手つだつて、顏なり白い手足なりなどを、しづかに目の前に思ひ浮ばせてくるのでした。

「姫よ。わたしはあなたと毎日逢つてゐるが、毎日逢つてゐるものが遂に逢へなくなるやうに、また會つて話したことがないやうに、しまひには逢へなくなると思つてゐる。それゆゑ、私はたゞこの塔の内におん身があり、おん身と親しんでゐると思ひ込んでゐる。私の願ひはそれで今は終つてゐる。おん身が私といふものを知らうが知るまいが、もう私にはさういふことは何でもないことだ。」

郵便屋はさう言ひながら、いつまでも見つめた塔の内部にさながらなうす紅い人影を心に描きはじめるのでした。

さういふときは、れいの塔の上で、赤い灯がたつた一つ、あたりの蒼茫とした原野に向つて、ほつんとさびしく瞬きながらともれてゐるのでした。何のために年若い彼女がさういふ幽閉に等しい塔の上にゐるかといふことを知らない村人らはその明りのともれてゐることによつて今宵も彼女がそこに坐つてゐることを知るくらゐでした。

さういふ晩、郵便屋の家の塔の上にも、關羽廟にともれてゐるやうな赤い蠟燭が一本、うめあかい光をあたりに漂はせてゐるのでした。その下に蹲んでゐる郵便屋は、もう年若くして惱みつくしたものゝ、皺深い顏を吸はせながら夜とともに浮べてゐるのでした。

塔のあかりが消えると、かれも又、手扇で自分の塔の灯を打消してしまふのでした。

「灯が消えた。そして私の灯も消すときが來た。わたしのねむるときが來た。わたしの姫よ。おん身のねむりも今やつて來た。安らかに姫よ。ながくねむれ。」

かれは、さう獨言をすると、肌ざはりのわるい藥床につかれた體をよこたへるのでした。

蒼白い大陸の濃い夜の空氣は、間もなく彼と彼の家、さては塔の上を次第に覆うてゆくのでした。

三

女の子は、毎朝のやうに村はづれから出てくる郵便屋の、さびしい姿をみると、わざ〳〵窓近くよつて眺めるのが常になつてゐました。なぜかしら、かれの通るごとに、彼女はさうしないでゐられないのでした。郵便屋もまた、塔の上を仰ぎみると、ちよいと足を停めながら靜かに見まもるのです。さうかと思ふと、きふに歩き出して、都會の方へ向つてゆくのでした。

或日、郵便屋は塔の上から、白い布のやうなものが落ちてくるのを見ました。かの女がわざとそれを落したものか、それとも過つて落したものかわからなかつたが、かれはそれを拾ひあげて見ました。それには、不思議なほど正確な郵便屋自身の姿が、かの女の手によつて描かれてゐるのでした。

かれはびつくりして自分の姿と、紙のうへのかれ自身とを見くらべました。すこしの間違ひもなく叮嚀にかゝれてあつたのです。

「やはり姫はわたしの姿を、その心にとめてゐたのか。」

かれは、その白紙を抱いて、塔の上に向つて微笑つてみせました。

かれが十年にちかくさうやつて通つてゐるうちに、けふ、はじめて微笑むことができたのでした。それは皺深く龜のやうに悲しげな顔だつたのです。

塔の上からも、しづかな微笑がもれました。かれは、その姫の微笑を始めて見たのでしたが、最初にながめたころからみると、すつかり年をとつたやうな、まるで違つた顔になつてみえました。

かれは不思議にその顔を見かへしました。そこには十年も長い間坐つたきりの不思議な老をきざんだ顔がしづかに微笑つてこちらを向いてゐたのです。

「はじめて見たときの姫は、まるで子供だつた。そして美しかつたが、この變りはどうだらう。」

かれはその紙片を抱いて家へかへると、いまさらのやうに、自分で築いた塔の上の苔の青々してゐるのを眺めました。ながめてゐるうちに刻まれた寂しい十年の月日が目にうかんで來ました。

かれは夜になつて塔のあかりを見に出ましたが、その晩からそれが灯れなくなり、人影すらもな

くなつてゐました。ただ廢屋同樣な塔の上には、なぜか、その翌朝、金色をした蠅が一ぱいに何か腐れた、けだものゝ肉にでも群るやうにぶんぶんさわいでゐました。

その蠅のうなりは原野の遠くまでもきこえてゐたのでありました。

龍宮